

ENSOKU Vol.6

全速力

ZENSOKURYOKU



2006.2.0



全自動箱型昇降機作動中

An elevator is working now!

星 裕一郎



もくもくもくもく。

先生からついさつき手渡されたプリントを教室で皆に配っている、どこからか白い煙発生。一瞬だけ不審に思ったけれどもそれはそれ、今はこのプリント配りを続けようと教室を端から端へと歩き回る。

こちらにプリントを託した先生は弱ったドラキュラみたいな顔をしていてどことなく頼りない感じ。もちろんドラキュラなんて見たことはないけれど。その先生はキュートと言ってもまあ良いかなと思つたその八重歯をちらりとみせて教室を出ていってしまつた。どうやらプリント配りは完全に任ざれてしまつたようだ。ここで立ち上がらなければ女がすたる。

手中のプリントはとても小さい。五センチメートル×十センチメートルくらいの大きさで、つまりは五十平方センチメートルくらいの面積。何かの半券のようにも見える。学校で配るプリントには確か決まつた大きさがあつたではないか。それこそワシントン条約か何かで決められているに違いないと思えるあのサイズはどこへ行ったのだろう。

教室の後方の席に座っていた男子のグループに知つた顔を発

見。確か高校時代の同級生だつたはず。あまり自信はなかつたけれど、そんなこともどうでも良いのだ。無言でそのグループの人数分のプリントをその男子に手渡すと、せつせつせつと次は空際の席で固まつている女子のグループ。はい、と声を掛けると数人の女子がこちらを向いた。またまた知つた顔。彼女たちは中学校のときのクラスメート。あれれ、じゃあ彼らはどうしてここに。そう思つて教室の後ろの方に顔を向けると、煙に邪魔をされてよく見えない。白い煙はどうやら床から発生している。ちらりとそちらを見た。

おかしいなあ、ここはどこだろう。そんなことをぼんやりと考えていて初めて気がついた。

再び床を見つめる。

もくもくもくもく。

じつと見つめる。

やっばり。

これは煙じゃない。

「湯気だあ」

栗原杏樹くりはな あんじゅは自分が発したその声で驚いて、そして目を覚ました。

浴室。

自分の大声がまだ少し響いている。

その他には目の前のシャワから流れている湯がたてる音。

湯からはもくもくもくもくと湯気。

「また寝ちゃったの……」杏樹は小さく呟いた。

栗原杏樹にはたまにこういう朝が訪れる。こういう朝というのは毎朝浴びる起床してすぐのシャワ中に寝てしまう朝のことだ。もちろん、普段はベットで寝ている。当然だ。それは近年、先進国に住む人間が平均的に手にした文化の一つ。しかし、ほんのたまに、具体的には大体月に一回から二回くらいの割合でこうして浴室で気を失ってしまうのだ。

ベットで寝ているときはあまり夢を見ない杏樹である。もしかしたら起床したばかりの杏樹が覚えていないだけかもしれない。確かにその傾向はある。寝起きの彼女の機嫌は自分でも良いとは言いがたい。修学旅行など他人との物理的距離が比較的近い地点で寝て起きなければならないときは、少しばかり周囲に迷惑をかけることがある。彼女たちには悪かったなあと今更ながら反省。しかし、彼女が望んでその部屋で寝ていたわけではない。先生が決めたのだ。恨むのならば部屋割りを決めたその先生たちを恨んで欲しい。それに、もうこの先、修学旅行はないだろう、きっと。朝から人生に爽やかさを求めているわけではないので、現在のところ、そこに大きな問題はないと考えている。

どうしてだか、シャワ中に寝てしまうと、ほとんど必ずと言って良いほど夢を見る。その夢は、大抵今回のように、ほのぼのとした杏樹自身の過去をリアス式海岸のようにどうにかこうにか切り裂いて、それを動物園のパンダの白黒みたいなセンスで適当に並べて編集したようなものが大部分だった。そしてそれは今回と同様、いつももくもくもくとした湯気で終わる。いつか溺れ死ぬのではないか。そういった心配は当然ある。もし溺れ死んでしまったら新聞に載るだろうか。「独り暮らしの女性、シャワ中に溺死」とは、確かになかなか恥ずかしい見出しだ。しかし実はそれほど心配しているわけでもない。本気で心配しているのならばそれなりの手を打つ、適当な対策を練る。少なくともそういつた人生を歩んできた杏樹である。「それにしてもさっきのドラキュラ先生って……？」彼女はぼそつと呟いた。

さきほど夢で見たドラキュラ先生を思い出した。どこかで見たことがあるような気がするのだ。もちろん先ほど夢で見たばかりなので「どこかで見たことがある」という命題は正しい。いや、夢は「どこか」ではないかもしれない。

しかしこれまで自分の人生に係わりを持った「学校の先生」と呼ばれる人種にあの顔は見当たらない。覚えていないだけだろうか。そういう曖昧な印象ではないのだけだ。

終わりの見えない思考に自ら終止符を打って、しばらくそのままの姿勢でシャワを浴びた杏樹は、そつと自分の短い髪を触ってみる。

もう洗い終えたような感触。だがもちろん確信はない。

ちゃんと髪を洗おうかどうか五秒ほど思索したが、きつと自分は既に髪を洗ったのだろうと、いつかの自分を信じて、シャワを止めた。

体を拭きながら部屋に戻り、眠る前にベッドの近くに置いておいた眼鏡をかけてから時計を見る。この部屋で五指に入らぬろう勤勉さを有したその時計は時刻を七時と示している。正確には七時三分。

服を着る前にキッチンに向かって鍋に水を入れると、コンロで沸騰させる。

髪をぐちゃぐちゃにしながら拭いて服を着ると、沸騰したお湯の中に適当な量のパスタを突っ込んだ。

パスタを茹でている間にフライパンの上でベーコンを炒める。初めて自分のお金でオリブオイルを買ってみたときに「何だ、この匂いは……」と愕然としたが、それでもどうしてだかスパゲティを作るときにはオリブオイルを使用している。

茹であがったパスタの湯を切り、フライパンへ放ってベーコンと共に少し炒めると、レトルトのパスタソースを入れる。三

者を適当に混ぜて、塩こしょうしたら完成。

ひどい猫舌なのですぐに食べることができない杏樹は、完成したスパゲティをテーブルに置くと、座らずにそのまま台所に戻り、使用したばかりのフライパンを洗った。

適度に冷めたスパゲティを食べると、立ち上がって適当な服を選ぶ。そしてそのままバッグを手にして玄関へ。

玄関に置いてある真っ赤なマフラを首にまきつける。自室を出るとアパートのすぐ近くに停めてある原付のところまで歩いた。

杏樹は原付をスクーターとは決して言わない。原動機付き自転車、あるいは原付だ。たまにそれでは意味が通じないこともあるが、この程度のチャレンジは何をしても付きまとうものだ。自分の言っていることの意味がいつでも他人にきちんと通じているなどという幻想は小学校のときに捨ててしまっている。それに、これは単なる意地のようなもので、特に深い意味はない。山を歩いていて山賊に捕まり原付を目の前に突きつけられて「これは何という乗り物だ？ カタカナ言葉で答えよ。さもなればお前の命はないぞ」なんて言われたら、すぐに「スクーター」と答えるだろう。その程度だ。それにしても「さもなれば」とはいつの時代の言葉だろう。少なくとも彼女自身、使ったことはないだろう、きつと。それに「カタカナ言葉で」なんてハ

イカラではないか。といいつつも「ハイカラ」の意味を良く知らない杏樹である。

杏樹はこの原付を大事にしていた。数年前にとある変わり者の男性と別れてからずっと恋人のいない杏樹にとっては、今のところこの世でもっとも大切な物理的対象だろう。少なくとも「博愛」などという観念よりは大切だ。もしかしたら「博愛」は物理的対象じゃないかもしれないけど。

名前を付けようかと思ったことがこれまでの人生の中で七度ほどあったが、この子にふさわしい良い名前が思い浮かばなかった。それで結局名前は付けていない。

杏樹はそんな原付に乗り込んだ。

空を見上げると真つ青な空。

外は想像していたよりほんの少し暖かかった。

2

栗原杏樹は研究所の駐輪所に原付を停めるとそのまま建物内に入った。

駐輪所から一番近いドアをくぐったところで地蔵のような風貌のおじさんが掃除をしていた。彼はいつも会う度にどこかを掃除している。きっとそれが仕事なのだろう。杏樹は勝手にそ

う想像していた。もし間違えていたら若干失礼のような気がして確認をしたことはなかった。

「おはようございます」小さく頭を下げながら杏樹は挨拶をした。

男はそれまで杏樹に気がついていなかったようで、少し驚いたような表情をした。それから愛想のないいつもの地蔵の表情に戻ると小さな声で挨拶を返した。もちろん地蔵かどうかも確認はしていない。間違えていなくても若干失礼だと思ったからだ。

そのまま廊下を真つ直ぐに進んで自分の院生室に向かった。他の院生室には誰もいないようだ。明かりがついていない。しかし杏樹の院生室には明かりがついていた。

静かな動作でドアを開けた。

室内には予想していたとおり新堂日向（ほんとうのな）。

「おはよ」杏樹は新堂に向かって挨拶をした。

「おはよう」こちらを向いた新堂は無表情でそう挨拶を返す。

新堂日向はこの学生で、栗原杏樹同様、身分は修士課程の一回生である。

自分の机の上に持っていた荷物を置いて椅子に座る。そして机の上を見つめた。机の上には本やら計算用紙やらが見事なまでに乱雑に積み上がっている。作業を始める前に机の上を片づ

けようかと思つたのだ。整理する暇はないが片づけるくらいなら可能だ。

しばらくそのままの姿勢でぼんやり。

一日の始まりは大抵ぼんやりで始まる彼女である。

「栗原さん」突然、その声が聞こえてきた。

びつくりして杏樹は思わず部屋を見渡す。当然部屋には杏樹と新堂しかない。

もしかして、と思いながら杏樹は新堂の方を見た。

彼はこちらを向いていた。

そこでしばし沈黙。

「あの……、つかぬことをきくけど……、今、喋った？」

「どうしてそれがかめことなの？」口調は責めているようだが、表情には先ほどから変化が見られない。

「うん……、えっと……、特に深い意味はない」

とにかく驚いた杏樹だった。

彼は「日向」という名前のくせに暗い。否、暗いわけではないのだらう。ただ、余計なことをほとんど一切口にしないのだ。

この院生室は六人部屋なのだが、杏樹と新堂を除いた四人はあまりこの部屋に寄りつくことがないので、大抵こうして二人きりになることが多い。しかし彼と何か会話をすることは稀で、どちらかが入ってきたときに挨拶、そしてどちらかが出ていく

ときに挨拶という「出先後先どつかん」形式のコミュニケーションが二人の常だった。確かに杏樹自身、こういった研究のための場で無駄な口をきくことはあまり好きではないが、やはりこの部屋のサハラ砂漠的乾燥対人モードは新堂が作り出しているものだらうと確信している。日本語として矛盾しているが、はっきり言って、彼との楽しい会話を諦める方が人間として幾分社会的であると思えるほどなのだ。

じつと新堂を見つめている杏樹だが、彼は何も話そうとしない。あれだけ喋って電池が切れてしまったのだから。もしかしたら何かの修行中なのかもしれない。どういった修行なのかわ解はできないけれど、それくらいこの男ならやりかねないだらう。とにかく待つてはみたが反応がないので我慢できずに杏樹は口を開いた。

「それで……、何？」

杏樹がそう尋ねると、新堂は少し困ったような表情をした。

「今日、時間ある？」

「今日、時間ある？」とはこれ如何に、などと思つたが、時代劇のような調子だと自覚して口にはしない。もちろん時代劇など一度も真剣に見たことはない。

「えっと……、もう少し説明してくれる？」ためらいがちに杏樹は尋ねた。しかし当然の主張である。

彼は思案するような顔をしてから話した。

「今日、もしも時間があるようだったら話があるんだけど」

話がある。

あの新堂の口からそんな台詞が飛び出そうとは。

話がある。

つまり彼が何か話すということだ。

当たり前だけだ。

しかしそんな当たり前が俄には信じることができない人格を有するのが新堂日向なのだ。

それくらい新堂は無口な男だ。

「今日って……、いつくらいを想定してきているの？」

「三時くらい」

杏樹は自分の頭の中にあるスケジュール帳を確認する。

「三時くらいかあ……」 間延びした口調で杏樹は答えた。

「ちょっとね、その時間には人と会う約束があるんだよね。他の時間じゃ駄目かい？」

「いや、用事があるなら良いよ」 そう言ってすぐに新堂は自分の机に向かってしまった。

あらら。

新堂の背中を見ながら思った。

なんて非粘着質な奴。

話しかかった話ってのはその程度なの。

この程度の不満がいくつか頭の中で、出来立てのポップコーンのように弾けた。

「そう言えば……」 杏樹はふと思ったって尋ねた。

「何？」

新堂はそう言って振り向いた。はっきり言って、これがすでに珍しい。話しかけた杏樹は、彼が振り向くこととすら期待していなかった。その程度の非礼は彼にとつて日常茶飯事だ。

「あの……、研究所の中を掃除している人がいるでしょう？」 先ほど入口であつたお地藏さんの顔を思い出しながら杏樹は言った。

無言で頷く新堂。

「あの掃除してる人の名前って知ってる？」

「あの人の名前？」 怪訝そうな顔をして新堂は答えた。「確か田中さんだったかな……」

田中とはずいぶんとまあありふれた名前。思わず微笑む杏樹。

「ふうん、新堂くんは何でも知っているね」

そんな杏樹にいつもの無表情に戻って新堂。

「そうでもない」

その日の夕方。

栗原杏樹は五条堀川にある、とあるマンシヨンの前に立つていた。

目の前で堂々と構えているマンシヨン。

杏樹はそれを見上げる。

ここは自分の住むアパートからはずいぶんと離れている。原付でここまでやって来た彼女は、それをマンシヨンのすぐ近くにあった公園の側に停めて、ここまで歩いたのだ。

ポケットに入れてある携帯電話で時間を確認。時刻は十七時五分。

高校生の頃は腕時計をしていたのだが、机などで作業をしているとどうしても時計が机にぶつかってしまい、それが気になって作業に集中できないという少々苦い経験を繰り返す内に、腕時計をする習慣がどこか闇の彼方に飛んでいってしまったのだ。

そんな闇の彼方へと飛んでいってしまったいくつもの習慣は今頃どうしているのかな。

などと暇なときに考えないこともない栗原杏樹だった。

さてさて。

そんなことはどうでも良い。

気を取り直してマンシヨンを見上げる杏樹。

マンシヨンは五階建て、それほど大きくはなく、正面から見える形状から推測するに、全体として直方体だろうと思われた。一階は駐車場、駐輪場で住居はない。正面にある階段を上がった二階にエントランスがあるようだ。

先ほどまで歩いていたのでマンシヨンの側面が見えたのだが、そこにはそれぞれの階にペランダが一つずつついているのが確認できた。他の部屋のペランダは今杏樹が立っている側、つまり正面側ではなく、裏側についているのだろう。

今日はこのマンシヨンが、正確にはこのマンシヨンに設置されたエレベーターが相手。

というわけで杏樹はゆっくりとした步調で階段を上がり、マンシヨンのエントランスに足を踏み入れた。

そこで心臓の音が大きくなったような気がする。

緊張しているのが自覚できた。

左右に各部屋の郵便受けのあるそのエントランスを歩く。すぐに突き当たりに位置するエレベーターの前まで辿り着いた。

栗原杏樹の数少ない、ほとんど唯一と言っても過言ではない趣味が「エレベーターのボタンキャンセル」なのだ。

杏樹が子供の頃のお話。

当時彼女は、現在も両親が住んでいるマンションに住んでいた。た。

小学校からの帰り。

ようやく一階まで降りてきたエレベータに乗り込んだ杏樹が「閉」のボタンを押すと、慌てた様子の青年が駆け込んできた。エレベータの駆け込み乗車は問題がないんだっけ、など思ったが、本人に確認するほど「デリカシ」に欠けた小学生ではない。

男は少しだけすまなそうに杏樹を一瞥すると、ボタンの方向き直る。杏樹の家は五階だったのでここでは「5」の数字が記されたボタンだけが灯っている。彼は慌てた様子で「7」とそれから「閉」のボタンを押した。

「あれ？」エレベータのドアが閉まるのとほとんど同時くらいに、本当に小さな声で男は呟いた。

そのとき杏樹は考え事をしていたので、男の発声に大きく反応してしまった。びくっと体を振るわせて、杏樹は青年の方を見た。

「間違えちゃった」視線に気がついたのか、男は苦笑しながら弁解するような口調で言った。

視線があつたまま何も言えない杏樹。繰り返すが、ここで「馬鹿じゃないの」と思ったことを正直に口にするほど「デリカシ」

欠けた小学生ではなかったのだ。

しかし心の中は「馬鹿じゃないの」状態で男を見つめていた杏樹。

そこで男は突然、エレベータのボタンのところを何やら素早い動作で操作した。

すると、灯っていた「7」が消えてしまったのだ。

「すごい、魔法使いみたい……」小さな声で杏樹は呟いた。

もちろんこの頃すでに小学生だった杏樹には、この世に魔法使いなどという怪しげな呼称の職業に就いている人間が存在しないことは理解していた。しかしそれくらいインパクトの強い出来事だったことも事実なのだ。少なくともその頃の杏樹にとっては「押してしまったエレベータのボタンが消えない」という事実は「黒海は実は黒くない」という事実くらい不動の真理だった。それがキャンセルできるなどということは、逆立ち世界一周以上に想像したことがなかった。

「そう？」彼女の声が聞こえたのか、男は振り向くとまんざらでもなさそうに微笑んだ。

「それ、どうやってやるんですか？」

男はしばらく微笑んだまま彼女を見つめながらどうしようか考えているように手を顎にあてた。

「教えてくれませんか？」杏樹はお願いするように言う。

「内緒……、だよ」

そのときに一つの方法を教えてもらった。

それから杏樹は十年以上の歳月をかけて近所や少し遠方、そこそ気軽に自力で行くことのできる範囲にあるマンション、アパート、ビルに設置されたエレベータを「キャンセル」し続けていたのだ。

エレベータの前に立つと、杏樹は左右に延びる廊下に視線を送った。

向かって左の廊下に二つ、右の廊下に三つ、部屋が見えた。右に見える三部屋の内の真ん中の部屋の正面に階段がある。廊下には誰もいなかった。

自分の知っている方法でキャンセル可能なボタンを有したエレベータならばほんの一、二往復で楽しみは終わらせることもできるのだが、滅多にそんなことはしない。また、自分の知らない方法でしかキャンセルできないときには何往復もエレベータに乗り続けることになる。一時期は誰にも迷惑をかけないようにとの秋桜(アキオ)のような慎重(じんじゆう)しい配慮から、深夜と呼ばれる時間帯を狙って行動していた杏樹だった。しかし、深夜だと、何往復もしていることに気がつかれたときの言い訳が苦し紛れの国会答弁よりも若干困難。その上、冷凍庫の中に封印した生肉のごとく周囲が静かなため、想像以上にエレベータの音が響くこ

ともあるようで、その建物の住人が部屋から出てくるということがあった。なので、このところは無難な、こういった時間帯を楽しみの時間に当てていた。

しばらく待っているとエレベータが二階に到着。

どきどき。

とりあえず最上階である「5」を押そうと思ったとき、エントランスへ続いている階段を駆け上がったくる女性の姿が杏樹の視界に飛び込んできた。

仕方がないので「開」を押して女性を待つ杏樹。コツコツとした高いハイヒールの発する音がエントランスに響く。女性はエレベータに乗り込むと、ほんの少しだけ杏樹に頭を下げて「5」を押した。

助かった。

杏樹は思った。

「5」を押していなくて良かったと、内心で安堵のため息をついたのだ。

きつとこの女性の住居は五階なのであろう。もしも杏樹が「5」を押してしまっていたら、この女性と共に五階で降りなければならなくなる。そうなること少々気まずい杏樹なのだ。

そつと「4」を押す杏樹。

エレベータが静かに動き出す。

当然ながら、今は楽しみを実行するわけにはいかない。それはこの女性と別れてからだ。

退屈。

しかしこれは、まあよくあることだった。

当然だが普通エレベータは一人乗りではない。このようにその建物の住人とはったり乗り合わせてしまうことはむしろ通常なのだった。

というわけで退屈だったので、杏樹は横目で女性を観察。

どこことなく新堂に似ている。

それが杏樹の彼女に対する第一印象であった。

どこのパーツがどうだとかそういうことではなく、何となく雰囲気は彼に似ていたのだ。

もしかしてお姉さんかも。

そんなことを考える杏樹。

しかしこれは充分にあり得ることだ。何しろ彼は、研究所で会ってもそんな話は一切しない。彼の家族構成なんて、きつと誰も知らないのだ。はつきり言って、それはちよるい国家機密並に謎である。

しばらくするとエレベータは四階に到着。

杏樹は黙ってエレベータを降りた。

降りる際に、反射的に軽く頭を下げてしまう杏樹。

閉じるドアの向こうに見える女性は、やはりどこことなく新堂に似ていた。

4

結局彼女のお楽しみ時間は二十分ほどだった。

「これではばらくまた研究研究の日々だなあ……」誰に言うでもなく杏樹は呟いた。

近所、あるいはそこから少し離れた地点をも許した「やや近所」といべき地帯の建物に設置されているエレベータはほとんど制覇している杏樹である。おかげで次のターゲットを探すだけでも一苦労なのだ。今のところ、その「研究研究の日々」は彼女にとって充実したものだったし満足できる生活だ。しかしやはりときには息抜きがしたくなることもある。別のもつと簡単な趣味を探すべきだろうか。このところ、そういったことを考えて少し鬱ふさぎ気味になっていた。

遊びを終えて五階でエレベータを降りた杏樹は、ふと気になつてそこを観察する気になった。

先ほどの新堂似の女性のことを思いだしたからだ。

エレベータを出て右に二部屋、左に三部屋と、二階と同様の部屋構成になっているようだ。

廊下はとにかく静かだった。まるで誰も住んでいないように感じられるほどだ。

部屋の番号はエレベータを出たところから見て一番右から五〇一、五〇二と順々にふられている。歩いてマンション正面まで来たときに見えたマンション側面についているペランダは、どうやら各階の五号室のものようだった。

各部屋が廊下から少し出たところに設置してあるため、玄関の脇の窓は廊下からどうにか見ることが出来る。左にあった三部屋の内の真ん中の部屋、階段のすぐ正面に位置したその五〇四号室だけ、明かりが灯っていた。

きつと彼女はここの部屋の住人だろう。

杏樹は勝手にそう思った。

それから彼女は階段で二階まで降りることに決めた。

毎日研究所までの通学ではたとえ雨の日でも原付を使用、また、唯一と主張しても良いと思われる趣味は「エレベータのボタンキャンセル」という栗原杏樹であったが、実はひどく乗り物に酔いやすい体質なのである。減多に乗ることはないが、タクシーなんかに乗ろうものなら、乗り込んだ段階で微妙な吐き気がして、動き出したときには「先生、私いつでも吐けます」とこんな台詞は多分なかったと思う中学生日記状態、しばらくしたら「泣かぬなら吐いてしまおうホトトギス」という意味不

明な戦国武将の一句を詠んでしまいたくなるほどだ。

趣味に興じている間はそれほど気にならないのだが、こうして課題をクリアしてしまつと、突然気持ちが悪くなることもある。何十分もエレベータに乗り続けるのはやはり杏樹の体には大きな負担のようだ。

とぼとぼとした歩調で暗い階段を下る。

近くで何かあったのだろうか、パトカのサイレンの音が聞こえてきた。

まあもう冬だしね。

よくわからない理屈で自らを納得させる杏樹。

それくらい疲れているようだ。

そこで。

「うわあ」四階から三階へ向かう階段に足を向けた瞬間、思わず大きな声を出してしまった。

その階段に何者かが座っていたのだ。

階段に座っている男がこちらに振り返る。

なんと。

そこにいたのは新堂日向であった。

彼と研究所の外で会ったことはない。いや、実は生協食堂の前などで会ったことがあるので、厳密には大学の敷地の外では、と言うべきかもしれない。とにかく彼とこうして街のどこかで

出会ったことなどなかった。

びつくりして何も言えない杏樹。

沈黙。

もう少し沈黙。

「どうしてここに？」沈黙を破ったのは意外や意外、新堂であった。

それはこつちの台詞だ、と言いたかったが、彼がここにいる事情如何では彼の質問の方が妥当だということになるな、と意外に冷静な分析をする。

「いや……、うん」よくわからない返事をしてしまった杏樹。

彼はゆつくりとした動作で立ち上がった。

沈黙。

もう少し沈黙。

まさかとは思うが、彼は今の返答で納得したのだろうか。

もしもそうだとしたら、それは完全にホラーの領域であろう。

しかし確認はできない。

沈黙。

「じゃあまたね」仕方がないので別れを切り出す杏樹。まったく仕方がなくはないのだが。

「じゃあ僕も帰ろう」新堂は小さな声でそう言った。

おいおい。

どうしてだよ。

何か用事があつてそこにいたんじゃないのかよ。

しかし帰るなども言えない。

二人はそうして黙ったまま階段を降りた。

二階に辿り着くとエントランスの方まで歩いて、再び階段を降りる。

先ほどのサイレンの音源であろうパトカがマンションの前に停まっているのが見えた。

何かあつたのかな。

杏樹は一瞬だけ考えたが当然結論など出ないので、すぐさまその思考を放棄する。

結局無言のまま二人はマンションを出た。

「そう言えは……」杏樹は思いついたことを尋ねる。「ねえ、新堂くんってお姉さんいる？」

「どうして？」

先ほどエレベータで一緒になった、どこか雰囲気の新堂に似たあの女性のことを思い出したのだ。あれから彼女がエレベータに乗って下に降りたということとはなかった。きつと五階に彼女の部屋があるのだろう。もしかしたら新堂はあそこであの女性を待っていたのかもしれない。そう思ったのだ。

「ここ、もしかしてお姉さんの住んでるマンション？」

黙って首を横に振る新堂。

「違うの？」

黙って首を縦に振る新堂。

「どうか、君、少しくらい喋れよ。」

「ふうん」ため息とともに杏樹は呟いた。

「僕に姉はいない」

早くそれを言えよ。そう思ったが口にせず。

「そっか……、変なこと書いてごめんね。じゃあ私、帰ります。」

また明日」そう言っただけで杏樹は歩き出した。

「送ろうか？」小さな声でそう言うのが聞こえた。

内容にびっくりして杏樹は立ち止まる。

自分の耳を疑った。

ノストラダムスの大予言くらい疑った。

彼の口から発せられる台詞としては「おっ、クロック」という意味不明発言の方がまだ自然だ。いや、それはないかもしれない。

「今……、新堂くん？」恐る恐る後ろを振り返って確認をした。

新堂は頷いた。

「どういうこと？」一応確認してみる杏樹。この場合、彼の発言を聞き間違えていないかどうか確認した、というよりも、自分の中にある新堂像と現実の新堂とのギャップを確認した、と

いう方が正しいだろう。

「暗いし」

再び驚いて、思わず目をおおきくしてしまふ。新堂は空を見上げた。杏樹もつられて空を見る。確かにもう夜だ。彼の主張するとおり、暗い。しかし杏樹が驚いたのは「暗い」という形容が空に向けられたものではなく、彼自身に向けられたものと勘違いしたからだだった。

「パトカが停まっているし」

「まあ……、ね」ちょうど警察官らしき人物が出てきたパトカを見て杏樹は頷く。

「一応、女性だし」再びぼそりと新堂は言う。

今度は咄嗟に杏樹は新堂を睨んだ。「一応」とはどういう意味だろう。これが新堂以外の人間だったら是非深く追求したいところではあったが、相手が相手だ。特に深い意味はないかもしれない。少々気になるが気にするだけ無駄だという気がしないでもない。

しかし、あの新堂が「暗い夜道で女性を一人で歩かせるのは危険だ」という常識的な認識を持つていたこと自体、なかなか衝撃的というかショッキングというかどちらも同じ意味ではないか。杏樹はそんなことを思った。

「ありがとう」軽い口調で杏樹は言った。「でも大丈夫だよ。こ

「ここまで原付で来たからそれに乗って帰るし」

新堂は何も言わずに頷いた。わかった、あるいは了解したあたりの意味だろう。きき返さないとところを見ると、どうやら「原付」で意味が通じたらしい。

「じゃあまた明日」手を振りながら、歩き出した杏樹はそう挨拶をした。

しかしすでに彼はこちらを見ていなかった。

5

マンションで新堂とばったりびつくり遭遇した翌々日の朝。

インターホンの音。

栗原杏樹がいつもどおり寝起きのシャツを終えて服を着ると、室内にインターホンの音が響いた。

こんな朝に誰だろうかと思いつつ、彼女は玄関に向かった。ドアに設置された覗き穴から外を覗く。そこには見知らぬ二人の男性が立っていた。一人はやたらと背が高く体が細身で、もう一人は顔が立方体のように角張っている。

「はい、どなた様でしょうか？」朝なので決して機嫌は良くない。それでも精一杯の敬語を用いて金属製のドアに話しかけた。

「栗原さん……、のお宅ですよね？」低い声が聞こえた。

「そうですけど……」このけどはもちろん否定ではない。

誰だろう。

「どなた様でしょうか？」さっきと同じ質問を繰り返す。

「警察です」隣を気にしてくれたのか、小声でそう返事が返ってきた。

「はい？」思わず声が大きくなる杏樹。

「警察です」まったく同じ答えが返ってきた。

「ちょ……、ちょっと待ってください」

杏樹は慌てた口調でそう返事をする、とりあえず部屋の奥に戻って考えた。

もしかしてエレベータのボタンをキャンセルしてまわるのは犯罪だっただろうか。しかし杏樹の頭の中にはその行為に該当しそうな法律は思いつかない。「エレベータボタンキャンセル禁止条例」。そんな条例はこの京都市にはなかったと思う。もちろん専門外なので何とも言えないが、いや、もしかしたらあれは不法侵入だろうか。うん、そう主張できないこともない。いやいや、もしかしくなくても状況次第では不法侵入だという気もしてきた。まずいなあ。

しかし自分が樂觀的な人格だという自覚のある杏樹である。特に、問題にそれほど興味がなく、また、自分の身の振り方が決定的でない状況下では尚更なのだ。

とりあえず対応することにした。というより、この場合それ以外には常識的な自分の行動が想像できなかったのだ。

「今から開けます……」そう言いながらドアの鍵をあけた。

「どうも朝早くにすみません」そう言っただけで目の前に立っている男の一人は軽く頭を下げた。

警察官二人組は杏樹の部屋に入ると、それぞれ名刺を杏樹に渡しながら名乗った。しかし名前は覚えられない。そんな情報は、優秀な忍者が吹いた吹き矢みたいに、光陰矢のごとくに頭を通り過ぎていった。朝は頭が回らないし、何より固有名詞を無理に記憶する行為などはほど遠いところに住んでいる。それにしても警察官が名刺を持っている、という感覚が杏樹には新鮮だった。

「お話というのは？」二人はいつまでも黙っているので杏樹が尋ねる。「あの……、適当な時間に出かけないと行けないので、用件だけ手短にお願ひできますか……？」

そもそもどうして自分がこうへりくだったような表現を使わなければならないのか、そんなことに彼女は少し腹を立てていた。やっぱり朝は不機嫌である。

「ああ、すみません」あまりすまなくさそうな表情で立方体さんが言った。「実は新堂さん……、新堂日向さんのことはご存じですよね？」

「はあ……」杏樹は頷く。

「彼から伺ってここに来たのですが……」そう言って立方体さんは一枚の写真を取り出す。「栗原さん……、この女性に見覚えはありませんか？」

杏樹は差し出された写真を眺めた。

そこに写っていたのは。

つい一昨日遊んだエレベータで乗り合わせてしまったどこか新堂似の女性だった。

「あれ？ この人……、新堂くんのお姉さん……」

「え？」立方体さんは驚いたような声を出した。のっぽさんは黙ったままこちらを睨むようにして見ている。

「あ、いえ……、何でもないです」慌てて弁解する杏樹。

「この女性、新堂さんのお姉さんですか？」立方体さんは尋ねる。

「いえ、そうではない……、と思います……」

どうも頭が回っていない。完全な失言である。杏樹は心の中で舌打ちをする。

「全然違うんです。いわゆる事実無根です」

「そう……、でしょうね……」

「どうしてそう……、この女性を見て新堂さんのお姉さんだと仰ったんですか？」のっぽさんが珍しく口を開いた。

「その……、何となく似ていませんか？」

「そうですねか？」賛同は得られなかったようだ。

「この人……、ええ……、知ってます。というか……、よくは知りませんが……、いや、まったく知らないかもしれません」よくわからない説明をする杏樹。

「はあ……」立方体さんは頷く。多分こちらの主張は伝わっていないだろう。いや、まだ特に何も主張していないが。

「この人をどこでご覧になりましたか？」のつぼさんが尋ねる。

「えっと……、五条堀川のあたりにあるマンションです」杏樹は説明をする。「昨日の夕方頃、私、たまたまそのマンションにいたんです。そこでこの女性に会ったんです。多分、あのマンションの住人の方だと思いますけど……」

「ええ、そのとおりです」立方体さんは頷いた。

「この人……、この女の人に何かあったんですか？」恐る恐る杏樹は尋ねる。

立方体さんがちらりとつぼさんの方を見ると、のつぼさんは無言で頷いた。それから再び立方体さんはこちらに向き直る。「実は昨日の夕方頃、この女性は亡くなりました」

「亡くなった……、って？」杏樹は驚いて大きな声を出してしまっ

「どうやら何者かに殺されたようです」のつぼさんが言う。

「我々はその捜査の一環で栗原さんのところにお邪魔しました」あの女性が亡くなった。

しかも夕方。

その上、殺された。

「えっと……、じゃああのパトカつて……」小さな声で杏樹は呟いた。

杏樹と新堂がマンションを出るときにパトカがマンションの前で停まったことを思い出した。

あの時点で彼女は亡くなっていたのだろうか。

「栗原さん」のつぼさんが言った。

「は、はい」突然名前を呼ばれたので杏樹は驚いた。

「あなたは夕方頃、何をしにそのマンションまで行かれたんですか？ 新堂さんはそのところをご存じないと仰っていたのですが」

困った。

これは困った。

杏樹は素直にそう思った。

「いえ……、その……」

ううん、怪しい。

もしかして今の私、すっごい怪しいかも。

そんなことを考える杏樹。

「お友達がああマンションにいらっしやるんですか？」

どうしよう。

額いておこうか。

いやいや、そうもいかないだろう。

もしもそうだと言ったらきつと、いやいや、間違ひなく確認されるはずである。

仕方がない。背に腹は代えられない。当たり前だ。そもそも背と腹は違うのだ。しかしお腹と背中がくつついたら考えてみてやっても良いと思わないこともない杏樹である。とにかく正直に答えることにした。

「エレベータで遊んでいた……、ですって？」 杏樹の説明をきいた立方体さんは、信じられないという表情でそうき返した。「あの……、えつと……、まあそんなところ……」実は「そんなところ」ではなく「ど真ん中」である。

「はあ……」もう二十歳も過ぎた大人がそんなところで、しかも自分の家からずいぶん離れたマンションまでわざわざ出向いて、遊んでいたということが、どうやら彼には信じられないようだ。

確かにエレベータで遊んでいました、では世の中渡っていけない。

「まあ良いでしょう」しかし、理解があるのか、ただ単純に話

を先に進めたかったのか、のつぼさんはあつさりとした口調でそう言った。「それで、何時頃から何時頃まで遊んでいたんですか？」

「えつと……」昨夜のことを思い出す杏樹。「五時から五時半くらいだったと思います……。帰った時間に関しては、新堂くんと同じはずなんですけど」

「あのマンションで新堂さんとお会いしたのは本当に偶然ですか？」

質問の意図がわからない。しかし答えない訳にはいかない。

「はい、偶然です」

「そうですか」立方体さんは頷いた。

それから昨日の夕方の話、マンションに着いてから例の女性と一緒にエレベータに乗ったこと、それからずつとエレベータで「遊んで」いたこと、しばらくしてそろそろ帰ろうと階段を降りていたら新堂に出会ったことなどを説明した。

「あの……」杏樹は気になったことを尋ねることにした。「五時半頃、私たちがマンションを出た頃にバトカがマンションの前で停まつたんですけど、あれはこの件でですか？」

杏樹の質問に難しそうな顔をした立方体さんの横で、のつぼさんはさらりと答えた。

「ええ、そうです」

杏樹は頷く。

「実は五時二十分頃に通報があったんですよ」のっぽさんは説明する。「被害者の部屋のすぐ下の住人の方からだったのです……、どうも上の部屋で暴れているような音がする、と」

「尋常じゃない音だったみたいなんです」立方体さんが補足した。

「それで来てみたら……」杏樹は言う。

のっぽさんは黙って頷いた。

やはりあのときのバト力はこの事件のために来たようだ。

「あの……、栗原さん。本当に五時から五時半くらいまでの間、ずっとエレベータに乗っていらっしやったのですか？」立方体さんは尋ねた。

「それは……」杏樹は答えた。「正確に時間を計っていたわけではないので……。でも少なくとも亡くなった女性が五階に上がってから、マンシヨンの前にバト力が来るくらいまでの間は乗っていました」

「そのときに誰かが一緒にありませんでしたか？」

「いえ」杏樹は首を横に振る。実際昨日はあの女性の他にはエレベータに乗り込んできた人物はいなかった。

「そうですね……」立方体さんはそう唸った。

のっぽさんも黙ってこちらを見ている。

「それでは何か問題があるんですか？」よくわからなかったの杏樹は尋ねた。

「まあ……、はい」

「新堂さんのお話なんですが」のっぽさんが話した。「彼、五時少し前くらいからずっとあの階段……、栗原さんと会ったというその階段のところに座っていたそうなんです」

確かに彼は四階と五階の間の階段のところに座っていたはずだ。「つまり、その時間帯は偶然……、栗原さんのお言葉をお借りすれば偶然にも、誰も五階から下には降りられなかったということになるんですよ」

そういうことか。

杏樹はようやく二人の表情の意味が理解できた。

杏樹はエレベータ、新堂は階段をそれぞれ塞いでいたことになるのだ。もしも新堂が五階から誰も階段で降りてこなかったと主張したならば、この状況では誰も下に降りてくることはできない。

そしてどうやら新堂も杏樹同様、誰も階段を通らなかったと証言したのであろう。

「そう言えば……、どうして新堂くんはあんなところにいたんですか？ もしかして刑事さん、知ってますか？」杏樹は尋ねた。「それは聞かない方が良いと思います」そこでのっぽさんは初

めてにやりと笑った。

意味がわからなかった。

しかし深く追求する気にはならない。

「まあ、とにかく新堂さんはずっとあそこに座っていたそうです」

「じゃあ五階の……」杏樹は思いついたことを口にした。「五階の住人の方が犯人なかもしれませんね」

「それがですね……」のつぼさんは言った。「五階には、あの亡くなった女性しか住んでいないですよ。当然部屋はあるんですけどね、どこも鍵がかかっています」

「被害者の方の……、あの女性の部屋の鍵はかかってたんですか？」

「いえいえ、それはあいていました」

それからしばらくして二人の警察官は帰っていった。

「もし何か思いだしたことがあったらそこに連絡をください」
渡された名刺を指さして立方体さんは最後にそう言って家を出ていった。

正直言つて杏樹は朝からどつと疲れてしまった。

警察が家に訪れるというシチュエーションを想定したことは、これまでの人生で当然一度もなかった。

研究所に行くのが億劫になってしまった。

杏樹が一息つくくと、今度は部屋のテーブルに置いてあった携帯電話が突然ヒステリックに振動を始めたので、杏樹は飛び上がるほどびびくりした。まったく心臓が悪い。杏樹はそれを手に取ってディスプレイを確認する。

友人の氷目景子こおりめけいこからの電話だった。

「僕だよ」彼女のいつもどおりの明るい声が耳に届く。

「どうしたの？ こんな時間に」疲れていたが普段どおりの声を出すように努める杏樹。

「こんな時間ってどんな時間？」

「朝」

「確かに」少し間をあけて彼女は返事をする。今が「朝」であることを何かで確認したようだ。

「どうしたの？」

「どうしたのって？」

「どうして電話してきたの？」杏樹は質問の仕方を変えた。

「ああ、そういうこと……。それがね、どうもこうもないんだよ。まあ、話があるの」

「ふうん」軽く応える杏樹。

「真面目な話なの」

「じゃあいつもは不真面目なの？」

「うん」景子の即答。ここで肯定するやつも珍しいではないか

と友人を評価する。

「どんな話？」

「電話じゃできない話なんだよね、これが……」そこでしばらく沈黙。「今度云ったときに話すよ」

おいおい、じゃあ何で電話するんだよ。と思つたが口にはせず。

「ふうん、わかった」あつさりとした返事の杏樹。

「君の方は最近何か変わったことはなかった？」

「あつたと言えばあつたけど……」当然、さつき杏樹の部屋にやって来た二人の警官のことを思い出した。

「何？ どんな話？」

「私も会ったときに話すよ」

「何それ。僕には話せないような話なの？」

「うん、そういうわけじゃないよ。だから会ったときに話すつては」

「ふうん、僕には話せないんだあ。いやらしいんだあ」

すでにコミュニケーションが崩壊しかかっている。言うことを聞かない困った奴だ。しかし「言うことを聞く困った奴」よりは多少ましかもしれない。

「わかったわかった」諦めて杏樹はそう言った。

「何？ 話してくれるの？」

「うん」

警察官が家を訪れた話は、杏樹自身がよく状況を把握できていないのでまだ話すことはできない。それは少なくとも新堂に話を聞いてからだ。ということで、別の話をすることにした。

「あのね、この前オムライスを作ったんだ」

「ふうん、相変わらず料理少女なんだな、君は」

「何なのよ、その料理少女ってのは」笑つて杏樹は言う。「まあいいや、それでね、どうも久しぶりだったからなのかな……、上手にチキンライスを卵に包めなかったのよ」

「もしかしてそれだけ？」冷たい口調で景子は言った。

「まあ……」

「つまらない話」景子はぱつぱりと評価した。

「あそう……」

「それで、どうして久しぶりにオムライスなんて作ろうと思つたの？」

「ああ……、うん……、ちょっとね……」予期していなかった

質問の返答に困る杏樹。

「もしかして男関係？」

「男関係のオムライスって何？」わざととぼける杏樹。

「あらららら」景子は笑つて言った。

「でも違うのよ……」杏樹は弁解した。「どうも話がつまらなかったのかな……、オムライスだけ食べてその人帰っちゃった

し……」

「それはきつと君が悪い」景子は断言した。「僕の経験上、君がそういう状況に陥るときって大抵君が悪いんだよ」

「え？ 黄身が悪い？」

「うん」

「そうかなあ……、そうでもないと思うよ。賞味期限もぎりぎり切れてなかったし……」

「ふうん……。それって、珍しく問題発言だと思わない？」

「そう？」

「うん、自覚ない？」

「ない」

「あそう、まあいいや。でもいつまでもそんな風に思っていたいよね」

「何が？」

「だから僕たちの賞味期限」

「意味わからないじゃん」

6

「そんなもん、ペランダから出ていったに決まってるじゃん」
新堂のすぐ左隣に座っている富士見克己は、杏樹の話の聞くと、

いつもどおりのぶつきらぼうな口調でそんなことを言った。

その日の昼。

友人からの電話でほんの少しだけ元気を取り戻した栗原杏樹は、いつもより少し遅い時間に院生室にやって来た。彼女は新堂日向の姿を見つけると、今朝警察がやって来たという話をした。

「僕のところにも昨日警察が来た」

話を終えてしばらく訪れた沈黙、まさかここでも彼の無口が發揮されるとは杏樹は思っていなかったが、とにかくその小さな沈黙の後に新堂はぼそつとそれだけ言った。

だからそれは警察から聞いたつてば。

家に警察が来たのはあなたから話を聞いたからだよ。

杏樹はそう思ったが面倒だったので口にはしなかった。

そうしてまたまた室内には、いつもよりちよつと湿つた感じの沈黙が漂った。

「おうい」富士見がのんびりとした声でそう言った。「新堂くん、ちゃんと元気？」

「富士見克己は杏樹や新堂よりも二学年上、博士課程の一回生である。」

めつたにこの部屋に來ない彼だったが、今日は珍しく朝から研究所に來ていたようだ。

富士見克己は縦にも横にも大柄な人物だ。きつとそんな機会はないと思われるが、もしもエレベータに長時間二人で乗り合わせってしまったら、息苦しい、酸素を持っていかれてしまう、そんな想像を思わずしてしまいうくらい大柄だ。しかし態度がそれほど大柄ではない、という点は救いであろう。基本的に親切な人格で、杏樹や新堂のような後輩に対しても、彼は気軽に話をしてくれる。

新堂は富士見の質問に黙って頷いた。しかし杏樹の客観的評価では「いつもどおり元気なし」である。

「あ、富士見さん……、すいません。もしかしてうるさかったですか？」遠慮がちに杏樹は尋ねる。

「いいや、そうでもないよ」富士見は答える。「それより警察って……、何かあったの？」

「あ、はい……」

杏樹は頷いたが、話して良いものなのだろうかと一瞬考えた。テレビでやるようなサスペンスなどでは事情聴取の後に警察官が「この話はいくらも他言無用で」から大体半径数十センチあたりのところを位置する表現を、事件の関係者に行っていたような気がする。しかし今朝、あの二人には特にそのあたりのことを注意された覚えはない。まあ良いだろうと杏樹は勝手に判断して、先日からの話を富士見にした。

「ふうん、それはすごいねえ」それが富士見の感想だった。

彼がどの部分を「すごい」と評価しているのかいまいち不明確であったが、杏樹はその感想を聞き流すことにした。

「ねえ、新堂くん」杏樹は新堂に向き直ると、確認したかったことを確認することにした。「新堂くんはずっとあの階段のところに座っていたの？」

彼は頷く。

「何時頃から？」

「五時くらい」即答だった。

「新堂くんがそこにいる間、誰もその階段を通らなかったの？」新堂は頷く。

それにしてもイエス・ノーで答えられない問いならばちゃんと言葉で返事をするのだなあ、と妙なところに感心してしまっ

五時か。

杏樹がああマンションを訪れたのも、確か大体それくらいだったと思う。

「それがどうかしたの？」富士見が尋ねる。

「いえ……、あの……、さっきも言いましたけど、私、とある事情で、五時ちよつと過ぎくらいから、ずっとそのマンションのエレベータに乗ってたんですよ」

「とある事情って？」当然の質問である。富士見はきいた。

「いえ、まあ、そこはあまり本筋には関係がないんですよ……」そう答えて新堂の方をちらりと見る。彼は興味がなさそうだ。

「検査か何かしてたの？」
「できるはずがない。」

そんな免状は持っていない。

しかしそれはある意味でよいアイデアかもしれない。

杏樹はそう評価した。

エレベータの検査員の資格、そんなものがあるのかどうかよく知らないが、そんな資格さえ持っていれば長時間エレベータに乗っていると発見されても言い訳ができる。

「いいんです。そこは気にしなくてもいいんですよ」杏樹は言う。

「そうなの？」富士見は言った。

「ええ……」杏樹は首を縦に振る。「とにかく私がしばらくエレベータに乗っていたという事実が大切なんです」

「ふうん」富士見は相槌を打った。しかしどうやら杏樹の強引な主張には納得していないようだ。

「私がエレベータにいる間、誰もそのエレベータに乗ってくる人はいなかったんです。それで……、新堂くんがずっと階段のところに座っていたってことは……、誰も五階から下には降りていないってことになるんですよ」

新堂は黙って頷いた。

「そんなもん、ペランダから出ていったに決まってるじゃん」
富士見は言った。

そんなことを考えもしなかったので杏樹は目を大きくした。

「俺、こう見えてもミステリアマアなんよ」にこにこしながら富士見は言った。

「へえ……、そうなんですか……。それは知りませんでした」
杏樹は正直に返答した。

杏樹自身、そういった類の本を読むことは滅多にない。ミステリなどというものを最後に読んだのは確か中学生くらいの頃だったと記憶している。作者も題名も忘れたが、作者も主人公も外国人だったことだけは覚えていた。

性格との相性の問題なのだろうか、どうもああいった小説を日常的に読む気にはなれない。

第一、不自然だ、というのが杏樹の評価だった。

たくさん読んだわけではないが、彼女の読んだミステリではどれも、話の最後に主人公の「探偵」と呼ばれる人間、そうでもないものもあつた気がするが、とにかくその「探偵」格の人間が物語のすべての謎を説明するシーンがあつた。しかし、どうして主人公は関係者全員をわざわざ集めて、あんな長々とした話をどうとうと聞かせるのだろうか。そもそもその点が理解で

きない。警察にだけ告げれば良いではないか。その方が方々に対して効率的であろう。

それに、ミステリで行われているどの説明も、明らかに非論理的であるという点も、どうも気になる。

明らかに警察の捜査方法がもつとも「論理的」にその事態を説明することは明らかであろう。もしもそうでなければその捜査方法が公的に採用されるはずがない。それなのに主人公は適当な思いつきで犯人や事件の状況を推理する。しかもその小説内現実ではそれが正解だという。

このリアリティのなさはなんなのだ。

そう杏樹は思っている。

なので、富士見がミステリマニアだと教えられても、特にコメントが思い浮かばなかった。

それにしても、ベランダか。

確かにその可能性はある。

というよりそれ以外にマンションから出る方法はないようにも思えた。

「その点は確認しました」淡々とした口調で新堂が突然言った。確かに新堂はいつも驚くほど淡々としているが。

「確認って？」富士見が尋ねる。

「警察に話を聞かれたときにきいたんです」新堂は説明する。

「どうやらマンションの裏側……、そのマンションの各部屋のベランダは、正面から見て裏側にあるのですが……、そこに公園があるそうなんです」

「へえ……。それで？」きわめて珍しい新堂の長い台詞に若干圧倒されたが、杏樹はとりあえず先を促した。

「たまたまその時間帯、五時から五時半くらいにかけてですが、その時間帯の間、ずっと公園にいた人物がいたようで、その人物の話では、誰かがベランダからマンションを出たなんてことはなかったそうです」

「ふうん、そうなのか……」富士見は呟いた。

新堂が「ベランダ脱出説」を早々と考えていたことに杏樹は少々驚いた。

「それに……、第一、どうして犯人はわざわざベランダから脱出したんですか？」杏樹は気になったことを富士見に尋ねた。

「え？」富士見は声を上げる。

「だって私も新堂くんもあそこにしたのは偶然なんですよ」杏樹は説明する。「エレベーターや階段が塞がってるなんて、普通は思いませぬよね？ だったらどうしてわざわざベランダからマンションを出なければいけないんですか？」

「ふうん……」富士見は唸った。

「もしかしたら……、サイレンかも」新堂は言った。

「え？」今度は杏樹が声を上げた。

「僕たちがマンションを出ようとしたときに、パトカのサイレンの音が聞こえてきただろう？ それで犯人も用心したのかもしれない」

7

「あのね、門のところで毎日お昼頃、お弁当を売ってるでしょう。ついこの前、そこでお弁当を買ったの」

「え？ 何の話？」突然の友人の話についていけなくて、栗原杏樹は思わずそう尋ねた。

「まあいいからいいから」余裕の表情で氷目景子はそう答えた。実際彼女の方は余裕なのだろう。

土曜日の昼過ぎ。

栗原杏樹と氷目景子は一人の通う国立K大学の北部生協に来ていた。

彼女の言う「門」というのは、杏樹や景子が今いるこの生協がある北部キャンパスの門のことだろう。杏樹はついさつき通ったばかりの門をふと思いついた。

土曜日だからだろうか、生協はすいていて、二人のいるテーブルを勘定に入れても、人がついているテーブルは片手の指で

足りてしまう。ぼんやりと周囲の様子を眺めながら、いつもこうだったらもう少し来ても良いかななどと考える杏樹である。

「それでね……、そこでお弁当を買おうと、お茶かお味噌汁がついてくるの、君、知ってた？」

突然の質問だ。しかし彼女のこのパターンにはすでに慣れている杏樹であった。景子には、自分の話の展開でも他者への質問という形式で進めるという傾向がある。

「うん、知っているよ」杏樹は頷いて答える。「私も前に一度だけあそこでお弁当買ったことあるし」

景子は軽く手を振ってみせた。これも彼女の癖の一つだ。きつと「了解した」とか、そのあたりの意味だろうと杏樹が勝手に解釈している仕草。

「ふうん、そうなんだ。まあいいや。それまでも僕、何度もそこでお弁当を買っていたんだけどね、お味噌汁って言われて、あの紙コップなんかに注いだやつをくれるものだとずっと想像していたの」

話の先が読めなかったので黙って頷く杏樹。

「そんなの貰っても歩きにくいでしょう？ だから僕はそれまでそこでいっつもお茶をお願いしていて、お味噌汁を注文したことはなかったの」

紙コップに注がれた熱い味噌汁を杏樹は想像した。いくら蓋

がしてあつても確かに持つて歩きやすい代物ではないだろう。全速力ではとても走れないし、ましてや「けんけんば」など以外での外だ。しかも買ったお弁当で片手がふさがつてしまう。状況が状況だったらそれを持つことすらできない。

「だけどね……、ついこの前、そこでお弁当を買っている人がお茶じゃなくてお味噌汁を頼んだの。特に気にもせず僕がその人の方を見たんだけど……、店員さん、その人に何を渡したと思う？」

「お味噌汁でしょう？」最初に思いついた答えを軽い調子で口にした。

「当たり前でしょう」何故か怒つたような口調で友人は口を尖らせた。「お味噌汁を注文したらお味噌汁がでてくるのは当たり前でしょうが」

確かにそれはそうだ。

「そうじゃなくてね……、なんとなどと、紙コップに注がれたお味噌汁がでてきたんじゃなくてね、インスタントの……、少しだけ味噌が入つてると思われるちっちゃいビニルの袋がついてきたつてことなのよ」

「もしかして話つてそれだけ？」

杏樹の発言に友人は驚いたように目を大きくした。どちらかというとな彼女は表情が豊かな方だ。

「それだけのはずがないでしょう？」どうしてだか怒つた口調の景色。

客観的に評価して自分が怒られる筋合いはないと思つたが口にはせず。

「それでね、僕もどうどうお味噌汁にチャレンジしてみたつてわけよ。わかる？」

杏樹は頷く。わからないはずがない。あるいはわかるはずがない。この場合、これら二者はほとんど同義だ。

「そうしたら店員さんがね、僕にこう尋ねたの。『わかめになりますか？ それとも油揚げにしますか？』つて」

「それで？」

「僕はねえ……、しばらく悩んだ結果、油揚げを選択したんだよ」

「油揚げ、好きなの？」

「いや、そうでも」

「ふうん、良かったね」杏樹は冷たくあしらつてみた。

「いやいやいやいや」ふるふるとう首を振つて否定する景色。「それがまったく良くなかつたんだよ」

「どうして？」

「とにかく僕はその油揚げが入つていると主張して店員がやまないビニール袋を持つて自分の部屋まで戻つたわけさ。それで

ね、ビニール開けて中身をカップに出してお湯を注いで……、

こうくるくるくる掻き混ぜたの。そうしたら……、なんと

……」

「何があつたの？」

「いつまでたつても油揚げが出てこなかったのよお」

「ふうん」

「しかもそれだけならまだ許してやろうと思つただけどね

……、なんと」

「なんと？」

「下の方からわかめが出てきたつてわけよ」

「あそう」杏樹は今度こそ冷たく頷いた。「それは大変だつたね」

「題して油揚げ殺人事件」

「誰も死んでないじゃん」

「油揚げ失踪事件」

「それならまあ……」

「油揚げ失踪殺人事件」

「だから誰も死んでないつて」

「ふうん」つまらなさそうな表情で景子はそう呟いた。「相変

わらず冷たいね」

あそう。

つておいおい。

話はそれだけなのかい。

杏樹は心の中ではそういつた疑問が渦巻く。

「お、あれは新坊じゃないかい？」

入り口の方を見ながら突然景子が言った。

その声をきいてぐるぐるの疑問が一気に収束してしまつた杏

樹もそちらに顔を向けた。入り口から新堂日向が入つてくると

ころが見える。

「おうい」景子は立ち上がつて新堂に手を振る。

それに気がついたようで、新堂はこちらを軽く一瞥だけする

と、すぐにトレイが置いてあるところまで歩いていった。

「まったく……、彼も相変わらずだねえ」小さな声で笑つて景

子は言った。

目の前に座っている友人に、同じ研究所に通う知人として新堂日向を紹介したのはもちろん栗原杏樹であつた。いや、あれが紹介だと言えるかどうかは杏樹にはよくわからない。少なくとも、その場で新堂が発した言葉は「新堂です」という山口県もびつくりな非常に端的な自己紹介だけであつたし、どこが気に入つたのかこの妙に躁な友人は「新坊だ、新坊だ」と自分の聞き間違いに気がついていない勢いで勝手に彼の呼び名を決めて、その挙げ句には杏樹と新堂にはよくわからない極めて怪しい鎌倉の大仏に対する知識を延々と披露してみせたのだつた。

しばらくして新堂がやって来た。トレイの上にはカレーだけがぼつんと乗っっている。

「あらら、シンブルブル」景子は愉快そうに言った。

新堂は黙って頷いた。どうやら突っ込みはないらしい。

「そう言えばねえ……」景子はちらりと新堂の方を見てから杏樹の方に向き直り、悪戯っぽい表情を浮かべて話した。「ついこの間、うちのマンションで何か事件があったみたいなんだな」「え？」杏樹は驚いて声を出した。当然、先日警察が訪れて杏樹に話したあの事件を思い出したからだ。それから新堂の方を見た。しかし彼は何でもないようにカレーを食べている。

そう言えば水目景子の住む家の場所を杏樹は知らなかった。

景子の話を聞いていて、彼女の家が大学からそれほど近くはないんだな、という印象を持っている程度だ。

「事件って？」杏樹は尋ねる。

「さあ？ よくはわからないけどね」景子はあつさりと答える。

「そんな大したものじゃないんだよ」

大したものじゃないということは殺人事件ではないだろう。

少し落ち着きを取り戻した杏樹はそう考えた。

それにしても偶然というものはあるものだ。

よくわからない内に杏樹は事件の関係者らしき存在になっていて、景子も自分の住むマンションで事件が起こったという。

「ねえ？」杏樹がそんなことを考えていると、景子はやにやしながら新堂にそう話しかけた。

意味がわからない。

新堂は景子を無視してカレーを食べ続けている。比較的「通常どおり」と言える彼の行動だったが、どこか怒っているようにも見えた。

「ふうん、無視だ無視だ」楽しそうに景子は言った。「カレーの相手してる方が新坊は楽しいんだあ」

「何を拗ねてんの？」景子がわからなかったので、杏樹は素直にそう尋ねた。

「ううん、何でもないのだ」景子はこのことしながらざらりとそう言った。「ようし、僕も何か食べよつと」

それだけ言って景子は立ち上がると、料理を選びに行ってしまった。

「どうしたんだろうね？ 景子」可笑しくなって杏樹は言った。

新堂は首を傾げた。「さあ？」か「僕に聞かれても困る」あたりが順当なところだろう。それから彼は再びカレーの方を向いてしまった。

「ねえ、そう言えば……」二人きりになってふと、先日の院生室での彼の彼らしからぬ発言を思い出した。「この前、話があるって言ってたよね？ あれ、何の話だったの？」

新堂は本当に一瞬だけ驚いたような顔を見ると、ちらりと視線を逸らした。

そちらをこっそり横目で見てみると、そこでは景子がメニューを眺めている。

「何でもない」小さな声で彼は答えた。すでに表情はいつもどおりだった。

8

「あれ？ 杏？ やあ、もしかして久しぶり？」久しぶりに会った群青夕月は眠そうな顔でそう呟いた。

「まあね」栗原杏樹は口元を斜めにする。実際、思いきり久しぶりである。

夕月はしばらく何かを考えているような表情をしてから、唐突に口を開いた。

「こんなところで何してるんだい？」

「それはこっちの台詞」杏樹はそう言ってやった。

五分前。

研究所を出た栗原杏樹は、お気に入りのその原付に乗っていた。時刻は十八時半頃。

普段はこんなに早く帰宅する、正確には帰宅しようとするのではないのだが、このところどうも疲れているようで、集中力が散漫な自分を自覚することが多かった。集中できないようでは研究所にいてもあまり意味がない。久しぶりに家で本格的に料理でもしようかと思ひ、帰路についてのだ。

どうしてこんなに気が散ってしまうのだろう。

原因がわかれば対処も可能だが、それが自分でもよくわからないので困っているのだ。そしてその原因をぼんやりと考えてしまい、研究の方には集中できない。

いわゆる悪循環というやつだ。

もしかしたら先週の事件が原因なのだろうか。

そんなことを考えていると、杏樹を乗せた原付は荒神橋にさしかかった。

この橋は彼女の家までの帰り道の途中に位置していた。ここを渡るときは大抵、川の方に視線を向けて走っている。

小学生らしき子供たちが騒ぎながら土手を走り回っている様子が見える。杏樹はどちらかという子供が嫌いだったが、その光景には微笑ましいと思えた。

この時間のいつもどおりの鴨川の風景。

そのはずだったのだが。

杏樹はその土手から何か嫌な予感のようなものを感じた。

何だろう。

そう思いながら杏樹は少しずつ原付のスピードを落とした。

これが間違いだつたのかもしれない。

少なくともいつもの彼女だつたら、そんな予感など気のせいだと受け流していただろう。

しかし普段とは気分が少々違っていたそのときの彼女は、ついついそれが気になってしまった。

とにかく最終的には原付を道路の脇に停めて、気配の根元を真剣に目で探すことにした。

そこで見つけた対象が。
群青夕月であった。

「昼寝だよ。昼寝」杏樹が知っている夕月のそれよりも幾分ゆつたりとした口調で彼は言った。「見れば何となくわかるでしょう？」

「もう昼じゃないよ」杏樹は思いついたことを言う。

「鋭いね」どうやらその返答を予測していたようだ。すぐに夕月は言った。「確かに昼じゃない」

杏樹は久しぶりに出会った夕月の姿をまじまじと観察した。

「でも例えば……、昼から寝て起きてきたら夕方だった、この段階で何をしているのかと尋ねられても、昼寝と答えてはいけないのだろうか……？」夕月は自問するような話し方をした。

「何をぶつくさ言っているのよ」

「ぶつくさ」夕月は面白そうに繰り返す。

「昼からずつとここで寝てるの？」

「そんなわけないじゃないか」わざとらしく驚いたように彼は言った。

「だってそんなようなことを言わなかった？」杏樹は尋ねる。

「いやいや、あれはただ思いついた疑問だよ」

「ふうん」

夕月は楽しそうににこにこしながら杏樹を見ている。

相変わらず変わり者だ。自分のことは棚に上げて杏樹はそう思った。

「僕はね……、これこれ」彼はそう言いながら近くに置いてあった本を持ち上げた。

「何？」それほど興味はなかったが、一応尋ねる杏樹。

「本」

「本だね」杏樹は頷く。実際それは本だ。

「おいおいおいおい」慌てたような調子で夕月は言った。「それだけ？ ねえ……？ 普通だったら、そんなことは見ればわかるわ、とか言わない？」

「私は、わかるわ、なんて言わないよ」杏樹はそう言って微笑んだ。

「だったら……、そんなことは見ればわかるぜ、でも良いよ」
 「もつと言わないって」杏樹は少し笑った。「わざとやっているでしょう？」

夕月も可笑しそうに笑った。

「それで何？」杏樹は再び尋ねる。「その本がどうしたの？」

「仕事だよ、仕事」夕月は今度はつまらなそうな顔をした。

彼の仕事はなんと探偵である。

いまだきそんな職業で通用するのだろうか。初めて夕月にその職業名を聞いたときも、そして今も、杏樹はそう思い、そしてそれだけの感想しか持てなかった。まったく。渡る世間は鬼ばかりという格言もあるというのに。

しかもこの群青夕月という男こそが数年前、杏樹の恋人だった人物なのだ。

どうしてこんな変人と付き合っていたのだろうか。

答えは明らかであるが、たまにそんな自問をしてしまう栗原杏樹、二十二歳である。

「本を読むことが仕事？」杏樹はきいた。「ずいふんと書齋派な仕事になったのね、探偵さん」

「違うよ、違う」夕月は首を横に振った。「今回の仕事はたまたまそういうものなんだよ……。だけどそんな地味な仕事が嫌だから……。一矢報いる……。そう一矢報いるために僕はこう

してわざわざ鴨川の土手くんだりまで来たんじゃないか」
 「くんだり」杏樹は笑って呟いた。

「そう、くんだり」彼も笑った。

久しぶりに夕月の笑った顔を見る。

あの頃と、ほとんど変わっていない。

「気のせいかな？」突然、夕月はそんなことを言った。

「ん？」杏樹は夕月の方を向いた。「何が？」

「元氣……。ない？」

杏樹はふうつと大きくため息をついて答えた。

「まあね」

「何かあった？」

「何か……。ねえ……？」

「また当分会うこともないんだろから、話してみれば？」可笑しそうに夕月は言った。

そして杏樹は夕月に事件の話をした。

「杏には考えがあるんでしょう？」群青夕月は目を細めてそう尋ねた。

そのとおりだった。

だから栗原杏樹は驚いた。

しかし彼には昔からこういうところがある。

「まあ……、ね」杏樹は頷きながら言った。

「当てるあげようか？」

「え？」杏樹はきき返す。

「杏の考えていることを当ててあげようか？」

杏樹は黙って頷いた。

「多分……、杏は五〇五号室の……、元住人あたりが犯人だと
思っているんでしょう？」

凶星だった。

「住んでいたときに合い鍵くらい、普通は作るからね」夕月は
軽い口調で言った。「その部屋のベランダは、杏の話だとマン
ションの側面にあるんだから、マンション裏手にあるというそ
の公園からは見えない。パトカのサイレンの音に驚いた犯人は、
彼女を殺してから持っていた合い鍵を使って慌てて五〇五号室
に戻り、仕方がないのでベランダから脱出した。そんなふう
に思っているんでしょう？」

「どうしてわかったの？」

「いや、杏の考えそうなことじゃん」

「そう？」

「さあ？」夕月は微笑みながら首を傾げた。

自分の考えそうなこと。

ふうん。

そうか。

それがまだわかるのか。

杏樹は少し嬉しくなった。

「まあ警察も馬鹿じゃないからね、すでにきつとその可能性は
検討されて、それなりの捜査が行われていると思うよ」

杏樹は頷いた。そのとおりだと思ったからだ。

「少しは元気が出た？」

「まあね」杏樹は目を大きくして夕月を見た。

「それにしてもその新堂氏……、だっけ？ あやしいなあ……。

それは杏の新しい恋人候補か何か？」夕月はそうやってわざと

らしく話題を変えた。

まったく優しいんだか何なんだか。

杏樹は心の中だけでそんなことを言った。

もちろん微笑みながら。

「そんなんじゃないよ」しばらくしてから杏樹は答える。

「へえ……」夕月は目をくると回した。

「そんなんじゃないよ」杏樹は言った。「それに多分、新堂く

んは……」

もくもくもくもく。

先生からついさつき手渡されたプリントを教室で皆に配っている、どこからか白い煙発生。一瞬だけ不審に思ったけれどもそれはそれ、今はこのプリント配りを続けようと教室を端から端へと歩き回る。

こちらにプリントを託した先生は弱ったドラキュラみたいな顔をしていてどことなく頼りない感じ。もちろんドラキュラなんて見たことはないけれど。その先生はキュートと言ってもまあ良いかなと思ったその八重歯をちらりとみせて教室を出ていってしまった。どうやらプリント配りは完全に任ざれてしまったようだ。ここで立ち上がらなければ女がすたる。

でも、あれ、おかしいなあ、ここはどこだろう。そもそもどうして私が教室なんてところにいるのだろう。もう学校なんてところはずいぶんと前に卒業してしまっていて、ノソノソと街を破壊するゴジラなんて存在より縁が遠くなってしまったはずのに。

床を見つめる。

もくもくもくもく。

じつと見つめる。

どこからかいつまでも白い煙。

でも火のないところに煙はたたない、なんて言うし、もしかしたらどこかが火事なのかな。

それにしても、こんなこと、前にもあったような気がする。再び教壇の方を見る。

あれ。

いつの間にかドラキュラ先生が戻ってきている。

ううん、やっぱりどこかで見たことがあるなあ。

でもあんな先生は思い出せないぞ。

いや、待てよ。

あれれ。

もしかして。

あの人は。

やっぱり。

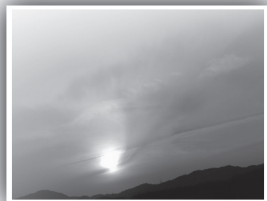
「高校に来てた教育実習生じゃん」

(J)



どこか遠く、旅に出よう

案西 稿志



真夏の福岡は、灼けるような太陽とこれでもかというほど多分に湿気を含んだ海風で、僕を迎えた。夏はやつぱりこうでなくちゃ。それと、冬はいらないです。

* * *

「だからつまり、纏めると何が言いたいわけ？」
「端的に言うと、正直な話、何と言うか、付き合って欲しいわけで、ここに来てもらってお話ししているわけです」

こんな会話だったのかどうかは、今となっては思いつけないが、こんな内容、こんな遣り取り、こんな雰囲気ですらばかりお話しして、僕と彼女は付き合うことになった（のだと思ふ）。

川崎市中原区は区都（と一部の人は呼んでいる）武蔵小杉を中心とした閑静な住宅街と下町つばさが同居した、良くも悪くもない感じの街である。

以前通っていた大学を卒業し、大学院進学のためにこの近辺に移って来たのが二月末だから、彼は半年も経ったわけか。

僕の恋人になった人は所謂お嬢様で、箱入り娘とはいかないまでも、まあ比較的ちゃんとした人間。ここ数年、午前中に起床したことなど記憶がない僕とは釣り合い様もない、というかそもそも生活時間帯が重ならない。しかも、とても純粋な心を

お持ちのようで、浮気の「う」の字でも聞こうものなら忽ち声を上げて泣き出しそうな雰囲気を感じ出している。

しかしそんな彼女につられて、いや、惹かれて、何となく守ってあげたいというか、可愛いというか。不純な香りがするけど、この際それは放っておこう。

前に住んでいたのは早稲田の北の方で、まあ何かと便利な事情があつて結局四年間も住んだ。バイトの関係で、今になってもたまにそちら方面に行くのだが、あの周辺と川崎市中原区は何となく雰囲気に近い。

まあそんな感じで、僕の新生活はそこそこ順調に、特に何の滞りもなく、穏やかに始まっていたのだ。

驚かれるかもしれないが、大学入学のために東京に出てきてから、今夏、学会の関係で訪れるまで、僕は実家というところに戻り、つまり、帰省したことがなかった。夏は大学の図書館で涼み、冬は家に引き籠もる。正月は数少ない友人たちと鍋を囲み、牌を握り、春になると花粉症で寝込む、という生活を延々繰り返していた。

特に何かのしがらみがあつて帰省しなかったのではなく、ただ単に、帰つても会うべき人がいない、それに尽きる。連絡を取っている地元の友人なんて皆無だし、今更母校に行つたつて、

自分のことを知っている先生が未だに存在するなんて思えない。親の手料理には大いに魅力を感じるが、何週間も前から予定を立て、飛行機の予約を取り、帰るときには誰と誰にお土産を、なんて数限りない面倒を考えれば、帰らない方が随分ましだ。

というわけで、研究室の先生に「今年の学会は福岡だよ」と言われるまで、実はもう福岡の土を踏むことなんてないんじゃないか、とぼんやり思ったりもしていた。それが突然舞い込んできた学会。幸運なわけではないが、お金は掛からない、面倒臭さもない（諸々の手続きは先生がやってくれる）という好条件、半分旅行気分、はい行きます、と即答してしまった。

それでもやっぱり憂鬱な準備というものがあって、お金を出してもらおう以上、色んな書類を用意し、銀行に行ったりして。一週間ほど掛かってやっと全ての準備が整った。

丁度お盆が終わった日、僕と先生は昼過ぎの羽田で待ち合わせ、福岡行きの日空第何便かに乗った。飛行機に乗るのも実に四年半振り、何となくわくわくしたけど、なんせうちの先生は初の国内便ということで、僕よりもずっとわくわくしていた。離陸して少し後、既に眠りに入っているところを見ると、自分より遥かに精神年齢が低いんじゃないかと思ってしまう。

この日はこれでもかというくらいにいい天気、雲の上とい

うのは文字通り雲がないので、日差しが真っ直ぐに突き刺さる。それでも覚悟を決めて窓から上の方を見ると、そうかあれがオゾンの色か、いつか習ったぞ、というような黒に近いような青。どこかで聞いた話では、あの黒は宇宙の暗闇が透けて見えていられるらしい。そんな宇宙が身近にも感じられるこの状況で、先生は眠りこけ、僕は日差しを気にしながら少しづつ少しづつ保坂和志を讀んでいた。

約一時間半の飛行の後、ごつんとでも擬音化できそうな衝撃音とともに、僕（と目が覚めたらしい先生）は福岡空港へと到着したのであります。

「本当はご飯でも食べたいところだけど、疲れたから今日はホテルでゆっくり休むよ。じゃあまた明日」そう言って先生は電車を乗り換え、ホテルに向かっていた。つーか、あなたさつきまでぐっすり寝てたでしょう、なんていう突っ込みはもちろん口に出さずに、適当な挨拶をして先生と別れ、僕は本当にまだあるのかと疑いたくなるくらい久々な実家への道程を歩き出した。

空港から実家へ向かう道のりは、半分を過ぎた辺りから、中高六年と浪人時代の通学路とリンクする。まあ地方で交通機関もそんなに豊富ではないから、当たり前といえは当たり前。

どんな変わり様かと期待して普通列車に乗ったのに、西鉄大

牟田線沿いの風景は四年半前と殆ど変化なく、結局片手に持った保坂を続けて読むことになってしまった。あと二駅というところで夕立が降り出し、自分の雨男つづりを再確認。しかし、東京では夕立が少ない。福岡にいた頃は夏と言えば夕立で、折り畳み傘を携帯しているのに濡れるのが気持ち良く使わず、家に帰るとよくプレッサーでズボンを乾かしたものだ。これも東京に出て初めて知ったことだが、『原』を『はる』と読むのは九州独特らしい。

そうこう考えているうちに実家の最寄り駅に到着。なんとここだけは周辺の風景ががらつと変わっていた。薬局がなくなつてロータリーができ、民家群がなくなりフィットネスクラブができていた。小雨になった夕立の中、駅前道をてくてく約十五分。フォルクスとスカイラクを過ぎ、御笠川を渡り、高校卒業の年にできた都市高速の下を抜け、国道三号線を渡つて左に曲がり、ほか弁の前を過ぎると実家のあるマンション。六階にある自分の住んでいた家のベランダは多分物凄く目立つ。緑でいっぱいだから。その上の七階のベランダには何も無い。中学から高校に上がるとき、そこに住んでいた家族は、遠くへ引越してしまった。末っ子だった同級生とは中学に入ると会うことも減り、ある日学校から帰ると、お世話になりました、と書いたメモだけが残り、居なくなっていた。

マンションのエントランスで、うちがこのマンションに引越してくる前からここに住んでいる家族と会う。ついでに管理人にも会う。あんた何年ここで管理人やってんだよ、と突っ込みたくなるが、またも飲み込んだ。ちよつとだけ昔話に花が咲くが、面倒臭いので、じゃ、と切り上げる。エレベーターに乗つて六階で降り、すぐ右側が実家。一応表札を確認し、これまた四年半振りにながやと鍵を開ける。誰か居るかな、と思つたけどやっぱり誰も居らず。ここに住んでいた最後の一年間は父親が失業していたため、家に帰ると彼が居ることが殆どだった。その頃は、五十代を目前に、平日は図書館に通いやたらと新しいことを勉強し、週末には海へ山へ。太陽電池を買つてきて自家発電を始めるわ、ログハウスの本を買つてきて、俺は家を建てるんだ、と豪語するわ。昔からそんな傾向はあつて、でもそれが加速した姿は息子から見ればはいはい張つて、という感じだったが、妻は堪らなかつたのではないかと、と今になって思う。まあ、そんな妻も息子の浪人生活があと一年続かかという時期に、夫とともに一週間の沖縄旅行に出掛けてしまったわけですが。

結局昼飯を食べなかつたので、腹が減っていた。冷蔵庫を開けてもすぐに食べられそうなものが入っていなかつたので、徒歩

一分のほか弁まで行き、チキン南蛮弁当を購入。恐らく両親のどちらかが帰ってくるまで少なくとも二時間はあるので、弁当を食べながら映画を観ることにする。少しうるさかったが、夕立の後の風が気持ち良かったので、窓を開け放した。父親の工作室と化した元自分の部屋のビデオ棚を一通り眺め、何がいかと三分ほど考えた後、『我が人生最悪の時』を取り出し、ビデオデッキにセットすると同時に、弁当を食べるための箸もセットする。そう言えば、このシリーズは横浜が舞台で、将来そっちの方に住むことになったら是非訪れてみようかと中学生くらいのおきに思ったことを思い出した。よし、川崎に戻ったら行ってみよう。でも帰るまでには忘れてそうだ。

それから約二時間半、既に弁当は食い終わり、映画も終わったのでソファで三度保坂を読んでいると、玄関からガチャリと鍵の開く音が聞こえ、母親が帰宅した。

「あら、帰ってたの」母はそう言い、ダイニングテーブルに荷物を置いた。

「ああ、お帰り」以前と変わらないそっけない会話。でもこの久しぶりの感じが何とも心地良かった。誰かと一緒に住むってのはやっぱり面倒臭いことだらけだけど、ちよっと温かい。

高校二年の秋、僕は初めて家出した。今考えても、我が人生

最高の時だ。別に何の不満があったわけでもなく、かと言って何かに突き動かされると言った衝動的なものでもなく。様々なものに對する憧れである。その頃よく読んで小川国夫と小林紀晴にある放浪への憧れ、この一点に集約される。そんな憧れに従って、極めて冷静に計画的に行われた家出だった。

ある朝、いつもより少し遅めに学校に行く振りをして家を出る。一時間もすれば父と母は仕事に出掛ける。その辺をサイクリングしながら、時間になると家に戻って着替え、今日は体調が悪いので休みます、と担任に電話を掛ける。これでいつでも家出できる状況が完成。ゆっくりと荷物の準備をし、JR鹿兒島本線に乗って熊本へ向かった。

当時、僕は熊本に住んでいる一ヶ年上のストリートシンガルの女性に恋心を抱いていた。ある夜、彼女が博多駅辺りで歌っているところに偶然遭遇し、その歌声（と、勿論容姿）に一目惚れしてしまった。そして何故か、今じゃ絶対にできないが、そのとき一緒に居た友人と彼女に声を掛け、一応知り合いということになったのだ。

鳥栖とりすを過ぎた辺りの駅で、特急通過やら何やらで三十分も停車するとアナウンスがあったので、僕は読んでいた本（確かトルストイ）を閉じ、公衆電話から彼女の携帯電話の番号を呼び出してみた。

「はいもしもし」少し眠たそうな声で彼女は電話に出た。

「あ、もしもし、僕だけだ」

「ん、どしたの」

「今から行つていい？」ちよつと怯えた声になつていたかも知れない。まあ、どうせもう向かつてるんだし、後戻りはできないのだ。

「はいはい、じゃあ着いたらまた電話して」気のない返事の彼女はそれで電話を切った。ただの冗談だと思つているのかも知れないが、その言葉で随分気持ちが悪くなったことを覚えていた。

「そう言えば、あの時の子とはまだ連絡を取つてるのか？」父親は七輪で自家製のオクラを焼きながら、目を合わせずに僕に訊いた。

「んなわけないでしょう」ちよつと焼き目の付いた木綿豆腐を方張りながら答える。

「その後会つてないのか？」テレビでは父親の嫌いなお笑い芸人が、ちよつと食事中には目を向けられないようなコントをやつていた。

「ああ」

「何だ、もつたいない。結構美人だったじゃないか」本当はそ

の後二回会つたけど、それは言わないでおいた。コントを見て、不覚にも吹き出してしまった。

熊本駅に到着すると、僕は先ず公衆電話を探し彼女に電話を掛けた。

「もしもし、熊本駅に着いたけど」

「あ、そう。じゃあ二十分くらい待つて」

「え……」意外な返事だった。さっきの電話は冗談としか思つていないものだと思つてた。何だかとても元気が出てきた。

あの頃から自分は馬鹿が付くほど正直というか、単純だった。余りにも嬉しくて、不覚にもコンビニでメロンパンを買つてしまった。コンビニのメロンパンは、袋の中に湿気が溜まり表面の砂糖が融け、その上クッキー部分が柔らかくなって、メロンパンのいいところを全て台無しにしている。一緒に買ったのがお茶じゃなくコーラで本当に良かった。

そうこうしているうちに二十分は過ぎたらしく、コンビニで立ち読みしていた僕は左肩に軽い衝撃を感じ、彼女が到着したことを悟つた。

「今は彼女とか居るの？」母は昔からそういう話題が好きで、事あるごとに姉と喋っているのを聞いた。

「うん、まあ」それなりに、とは続かなかったが、その言葉だけで、それ以上聞き出すのは無理と悟つたらしく、「あつそ」だけで母は言った。

「お前も何か飲むか？」父親は既に食事（と言っても缶端焼きなんだが）を終えて晩酌に突入していた。

「ああ、じゃあ」酒の種類を言わなければ、自分の場合は自動的にウイスキーが出てくることになっている。昔から日本酒は全く駄目、東京に出るまでは焼酎も殆ど駄目で、好きなのは『百年の孤独』と『森伊蔵』という贅沢な人間だった。日本酒の、あの甘ったるい匂いはどうしても耐えられない。

母親は冷凍庫から氷を取り出し、恐らくもう二十年は使っているアイス・バケットに入れ、「あんたもお父さんと一緒ね」と言いながら、白角のボトルと共に僕の前に置いた。

「やあ、お久しぶり」彼女は穏やかな視線で僕の眼球を覗き込む。

「うん、突然ごめん」

「じゃあどこに行こうか」何故来たのかとか、学校はどうしたのかとかを一切訊かず、彼女は歩き出した。後を追って僕も歩く。

「取り合えず荷物を置いて自転車を調達するか」事もなげに彼

女は言う。

「調達って、つまり窃盗するってこと？」まあ当然そうなんだろうけど。

「人間き悪いなあ。どうせ誰も使つてない乗り捨ての自転車を有効活用するのよ」説得力がある。まあ、法的にはやっぱり窃盗なんだが、そういう言い訳があれば、お巡りに捕まっても許してもらえる、と思いたい。

というわけで、熊本駅から白川へ歩く途中の土手に乗り捨てられたおんぼろ自転車の中からましなものを二つばかりピックアップし、ある種の技術を使つて鍵を外して僕らは見事高速移動を可能にする手段を手に入れたのだ。

「取り合えず、そのでつかい荷物を置きに行くか」

「うん」そう言つて彼女と僕は、緑から枯れ色に変わりつつある河川敷を横目に、白川上流に向かって土手を走り出した。

大学に入学して以来、アルコールの類を口にしない日はない。

何か忘れたことや嫌なことがあるわけではない。ただ、飲みたい。普段はそんなに酔酩することはないのだが、今日は何だろ、妙にアルコールの回りが速い。と思つたら、ボトルの半分弱を消費していた。既にアルコール中毒へのバックストレートへ突入していたらしい。

「お前もよく飲むようになったな」本当に嬉しそうに父親がしみじみ呟く。そう言えば、今日は日本酒しか飲んでいない。自分がこの家に居た頃は仕事から帰ってきて先ずビール、食事が終わって日本酒、風呂上りに再びビール、就寝前に何かしら洋酒、というのが毎日の流れだった。

「今日はあんまり飲んでないね」

「最近駄目なんだ。沢山飲むと次の日身体が重くて」夜のニュースが流れるテレビを眺めてそう言った父の表情が、少し悲しげだった。

熊本県熊本市は、小高い丘の上にある熊本城の下に栄えた昔ながらの城下町をベースに、九十年代に次々と建設された近代建築が散見される、一見不調和だが嫌らしさのない不思議な街である。

阿蘇からの雄大な水流を湛える白川が街のはずれを流れ、歴史を感じさせる繁華街は熊本城に向かって上通り、下通りという絶妙なネーミング。白川沿いに北東へ進み、少し外れるとあの有名な水前寺などがある。

十分ほど自転車走らせた僕らは、誰も居ない彼女の家に上がり、汗を拭いてから昼下がりの気持ちいい緑側で、秋の日差しを浴びながら麦茶をごくごく飲んだ。

「さて、一息ついたところでお話でも聞きましょうかね」悪戯っぽく笑って彼女は言った。

「うん。と言っても特に理由はないんだけど」貴女の顔を見たかった、とは恥ずかしくて言えなかった。

「泊まるとことかどうするの？」

「全然考えてないけど、お金はあるからどうにかなると思う」計画的な家出である。その辺は用意周到であった。

「そうか。でも何ならここに泊まっていいよ。どうせ母親は夜中に帰ってきて、昼前には出て行くから」

「そっか」ありがたかった。こういう旅のときは、節約に越したことはないはずだ。「じゃあ今日は泊まらせてもらおうかな」

それから特に何をするでもなく、テレビを眺めたり音楽の話をしたりしているうちに夕方になり、彼女が肉じゃがを作ってくれた。味はそこそこだったけど、嬉しさはそこそこではなかった。食べ終わった後、彼女は自分の身体には少し大きめのヤマハのフォークギターを取り出し、メンテナンスを始めた。

「今日も歌うの？」その姿を眺めながら僕は訊いた。

「毎日歌うよ。仕事だからね」少年みたいな表情でにこっと笑う。

「そろそろ出る？」

「もうちょっとしたら。一緒に来る？」

「うん」にこつとして僕は答えた。

父と母が床に就いた後、ビデオ棚から、十年ほど前にNHKが放送したシルクロードは天山南路・北路周辺の歴史ドキュメンタリーのビデオを引っ張り出して眺めていた。今日何杯目かの白角をグラスに注ぎ、氷を入れようとアイス・バケツを探ると、既に氷は消えてなくなりやたらと冷たい水だけが残されていた。明日は朝早いし、これを空けたら眠ることにしよう。

画面には、タクラマカン砂漠の飄々と、かつ寒々とした風景が映し出されていた。

次の日は、恐らく過去四年半で最も早い時間に母親に起こされて懐かしい朝食を摂り、顔を洗って歯を磨いた。そう言えば、ここに住んでいたときはこんな生活をしていた気もする。

「駅まで自転車で行くでしょ？」目を覚まして既に数時間が経過しているらしい母の声が少し頭に響く。

「いや、歩くからいいよ」弱々しく僕は答える。

「あ、そう。轆かれないうちにね」昔からの母の口癖である。

自転車で乗っていても、轆かれるときは轆かれると思うのだが、大体、今思い出したけど、小学五年のときに近所で車に轆かれ

た。自転車で乗っていて、もつとも、遠い昔のことだから覚えていなくても無理はないのだが。

徒歩を選択したのには理由がある。それは、移動速度が遅いほうが、景色の小さな変化、例えば雑草の生え方や店の看板の位置など、に気が付くと思ったからだ。何故、そんな小さな変化も知れたかったのかと訊かれると、返す言葉もないのだが。

でもやっぱり、自分の現在位置を確認するためには、過去がどんなものであったかを再確認する必要があると思う。細くて手摺もないような吊橋を一気に渡ることができる人も居るが、自分は決してそんなタイプではない。こつこつと足場を固め、それでもまだ不安で手摺まで作ってしまう人間なのである。

八月半ばを過ぎても九州の日差しは衰えを見せず、駅までの十五分を歩くだけで汗だくになってしまう。しかし、こんなに気持ち良く汗をかくのも久しぶりな気がする。西鉄大牟田線は話に聞くような他のローカル路線とは違って、二十分に一度は電車が来る。特にやることもない僕は、昨日から読み続けている保坂を開き、ほど良く冷房の効いた車内で読み耽る。途中駅で、小学生の頃通っていた学習塾の看板が美容室のそれに変わっているのに気が付いた。

偶然にも、今回学会が行われる大学のキャンパスへの道程は、地下鉄に乗り換えてから十分ほどで途中下車すれば六年間通っ

た中学高校まですぐなのであった。そんなことを考えているうちに、乗り換え駅に到着。改札を出て道路の向かい側には六年間使った懐かしのバス停がある。そういうえば、あの家出から半年ほど後、偶然彼女を見つけたがあの場所であった。

ある春の夜、まだ受験勉強も始めていなかった僕は、いつものように放課後を学校の図書館で過ごした後、教室で勉強半分、遊び半分で過ごしていた連中と合流し、他愛ないお喋りをしながら写真を撮ったりし、午後八時近くになってから学校を出た。公園とは名ばかりの森と動植物園の間を通る浄水通りを下ると、駅に通じる大通りに出る。当時全てを何となく遣り過ごしていた僕は、学校に遅刻しようがどんなに帰宅が遅くなるうが、バスに乗らずその坂道を独りでてくてく歩くのが日課だった。ただ何も考えずに歩くことで、迫り来る様々な事柄に対する焦燥感を忘れていた。

改札に向かう最後の横断歩道を渡ろうとしたとき、どこかで聴いたことのある歌声が聞こえてきたのだ。はっとして周囲を見渡し、その出所を見つけたとき、少しの興奮と安堵と、また少しの後ろめたさが湧いた。

少し遠い位置から懐かしい歌声を聴き、声を掛けようかと迷ったが、何となく気が進まずにその日は家に帰ることにした。

次に会ったときにも挨拶しよう。電車に乗ってから家に着くまで、外の風景に目を走らせながらも、耳の奥からはあの歌声が離れなかった。

次の機会は思いもよらず早くやってきた。あれから数日後、再び同じような時間に同じ場所で彼女は歌っていた。二、三曲演奏し終わって休憩している彼女に後方から声を掛けた。

「よう、お久しぶり」

「あれ」驚いた表情で彼女が振り返る。

「実は何日か前にも見掛けたんだけどね」

「学校、この近くなの？」屈託のない笑顔で彼女が訊く。

「うん、バスですぐだよ」僕もつられて笑顔になる。

「そっか。そうそう、こっちに引越してきたんだ」

「へえ。また何で？」

「何か音楽専門学校のコンテストで優勝しちゃってさ、ただで通わせてくれるって言うからさ」

「そりゃ凄いな。頑張ってるね」少し悲しい表情になったかもしれない。そうやって皆、音楽の道を進んでいくのか。でも僕だって同じだ。受験して大学に入って、多分何となく生活し、何となく大学を卒業して就職し、社会に役立っているかも分かんずき生きていくんだろうな。そう考えると、明確にやりたいことをやっている彼女の方が随分ましか。

その日は電車がなくなるまで彼女と話したり歌ったり、少しだけお酒を飲んだりしてから別れた。

「今度うちに遊びに来てよ。親父も会いたがってるからさ」

「そうだな。あのときは随分と世話したからね。ありがたくお邪魔させてもらいます」そう言って、やっぱり素敵な笑顔を僕に見せてくれた。


そろそろ夏を感じさせる、湿った海風が気持ち良かった。

(了)

学会第一日目を終え、少しだけ先生と話をしてから帰路につく。母校に顔でも出そうかと思ったが、気も進まないので散歩がてら昔よく行ったレコード屋を巡り、昔の友達に会う気にもならないのでそのまま家に向かった。

昔の友人と会いたくない理由があるわけではない。ただ、人間に限らずこの世界に存在するものは時とともに多少なりとも変化する。それが避けられないことは分かっているつもりだ。僕は、久しぶりに会った人が、自分の思い出の中のその人と変わってしまったことが怖い。そういう人たちから変わったね、と言われるのも怖い。自分の思い出ががらと音を立てて崩れていきそう。だから昔の友人、昔の先生、昔の恋人、そういう人たちとは極力会いたくない。思い出が崩れ去ったら、多分僕はもう生きていけない。

ちようど御笠川を渡ろうとしたとき、西の方角に夕日が見えた。空は赤く染まり、その色が水面にも映っている。こんな綺麗な夕日を見たのはいつ振りだろう。いや、世界のどこだって夕日は赤い。ただ、僕が気付いていないだけだ。あつちに戻ったら、綺麗な夕日でも探しに行こう。



カラスと血と雪

山崎 太陽



1 終り（オワリ）

『後悔先に立たず』と人は言う。

後悔の定義を、読んで字の如く『後に悔やむ行為』とする以上は、予め後悔するなんて不可能。それでも、後悔が先に立つとうとする。「ああもう、この後、絶対後悔するに決まってる！」と、予感でなく確信する。二者択一の状況なら「ああもう、これどっち選んでも絶対後悔する！」と頭を抱え、選択肢がN個あればN通りの結末をシミュレートしてN回後悔。

そんな事は、それこそ一週間に五十円の小遣いをいかに有意義に使うか、駄菓子屋でウンウン悩みに悩んでた頃から、確実にあった。野原を駆け回り回って橋の上から川に飛び込んだ頃から、頻繁にあった。下らない喧嘩をしては謝る事も出来ずに友達を失ってた頃から、何度も何度も繰り返しあった。

それに『幸せは失って初めて分かる』とも言うけれど、十代の幸福の最中、或いは試合開始のサイレンも鳴り止まぬ内に、「ああもう、絶対今この瞬間が絶頂だピークだ極大点だ下手するとマキシマムだ間違いない！」と確信した。

欲しい物を手にした後に必然的に待ち受ける、エンドレスのペナントレース。結果は惨敗。勝負に負けて、試合もコールド

負け、おまけに球界永久追放、そのくらい惨敗だった。

まあそれでも一応確かめてみようと思ってきた。例えるなら『周囲の生徒達の何倍もの速度で試験問題を解き終えて、ラクガキにも飽きて、暇過ぎて、時計を見ると残り時間はタツプリあって、彼らとは異なるストレスを抱え、暇潰しに全問解き直してみる受験生の気分』ってな所だろうか？ 違ふ。惜しいが、全然違ふ。我ながら芸術的な間違いつぶり。

つまり、そういう事。それでも僕は強がつて、試験用紙の隅に書いた。『人生Ⅱ消化試合』と。

現在よりも数段ショボショボでヒンジャクでボンコツだった僕は、そのピークを維持出来ないばかりか、自ら、激烈に最悪な終止符を打った。

それは、サッカーで例えるならオウンゴールに似た行為だった。自軍のゴールに向かって、ボールを手に取って投げ込むような、あつてはならないプレイ。

バスケットで例えても、やはりオウンゴールだ。センターサークルからオーバーヘッドで蹴り入れられるような、複数の意味においてあり得ないシュート。

野球で例えてもオウンゴール。ゴールの有無すら無視出来る圧倒的な自殺行為。さもなくば、ボールを刻んで炒めて醬油かけてガツガツムシヤムシヤ食べるような、意味不明の奇行。

悲惨。何が悲惨って、当時の僕にとつて、その奇行が最善策だったってんだから嫌になる。やれやれ、全く容赦が無い。

しかし、良くも悪くも人は何にだって飽きる。時間が経てば、何だつて色あせる。どんなに強い感情も薄れる。野球に飽きればグローブを捨て、油絵に飽きれば筆を折り、写真に飽きればカメラを売り、マンガに飽きれば原稿を燃やす。思えば、実に沢山の物を手放してきた。キャッチ&リリース。時間の消費。才能の垂れ流し。人生に飽きて、じゃあ余生は消化試合だって考えにも飽きて、悲観するのも被害者ぶるのにも飽きた。

あとはもう、なるべくシンプルに生きてみようか。最速パスを選ぶ電磁波のように。そうして待つていれば、いつかは終わるから。

2 資格（シカク）

「まず、ユートさんは、どんな仕事がいんですか？」

大学入学以来、三年間半で実に十以上の職種を経験した、自称『アルバイトの鉄人』天田^{あまた}シゲオは、僕に尋ねた。そんな胡散臭いコピーを掲げる人間に頼りたくはないが、背に腹は代えられないし、空腹による両者の接触も避けたい。

「人の役に立つ仕事」僕は即答した。

「ハハハッ！ アツハハハッ！」腹を抱えて笑う天田。

天田は研究室の後輩で学部四年生。研究室の他のメンバからは、『しげち』と呼ばれている。

「そんなにおかしいか、天田？」笑わずに言った。

僕は人を苗字で呼ぶ事に決めている。同姓の人間が複数いる状況であれば、下の名を口にしない事も無いが、渾名は決して使わない。

「ハア、ハア……、そんな真顔で、ひ、人の役に立ちたいなんて……」肩で息をしながら苦しそうに喋る天田。「ソツプツツ、いや、失礼しました」

僕はおもむろに顔を上げ、遠くを見た。院生室の窓に取り付けられたブラインド越しに、空を見つめる。雲一つ無い、故に寒い、そんな季節。学内の銀杏の葉も散り始め、黄色の絨毯がアスファルトを覆っている。

「いやいや、すみません」まだ笑いながらも謝る天田。「失礼しました……でも、ユートさん、そんな偽善キャラじゃないでしょ？ てつきり冗談かと思いましたがよ」

「冗談じゃない、とは言っていない」

「へ？」顔面全体で『へ』を表す天田。

「誰の得にもならない仕事なんて存在しない。誰かしらの役に立つからこそ、報酬は得られ、仕事として成立する。人の役に

立たない仕事は無い。すると先の僕の発言には意味が無い。意味の無い発言は、低レベルなたわ言か、高レベルな冗談か、そのどちらかだと思わないか？」

「……その冗談は、ちょっと分かり辛いです」

「冗談だ、とも言っていない」僕はすぐに言った。「低レベルなたわ言かもしくない」

「……」怪訝な顔をする天田。

「仕事といっても、物理学におけるそれではない」話を交える。

「ああ、力と変位の内積ですね」一瞬で顔と頭の具合を切り替える天田。

「因みに、拘束時間の短い仕事を希望する。院生の本業は研究だから。期間も短い方が良い。最大で半年かな」

コーヒーを一口飲んで、カップをテーブルに戻す。研究室の安物のテーブルが、衝撃でガタツと揺れる。カップがテーブルに仕事をした。

「じゃあ飲食は駄目ですね。何か、お金になりそうなスキルはありますか？」

「グラフィックソフト全般」

「あ、それならウェブ系も出版系も可能です……が、長期バイトになりますね。さすがに、半年で辞められたら困るでしょう。他には？」

もつともらしい事を言う天田。「鉄人」の称号も伊達ではないのかもしれない。あまり期待していなかったが、相談して正解だったと言えそうだ。

少し逡巡してから「食べ物の好き嫌いが無い」と言えば「お金になりません」と返され「英検五級」と言えば「話になりません」と返された。それでも諦めずに「書道十級」と言うと、

「それがどんなレベルなのか分かりませんが、ユートさんの字、北京原人並みじゃないですか。つか、さつきから真面目に答えてます？」とまで言われる始末。北京原人は文字を使用しなかったと思うが。更に「寝付きが良い」「寝相も良い」「素因数分解が趣味」「車のナンバを見ると、反射的に下四桁で引き算をする」と数打つが当たらず。趣向を変えて「旅の荷物が少ない」と言うと「運び屋でもする気ですか？」と突っ込まれた。「ああもう、いいです。やれやれです。俺が、ユートさんでも出来る仕事を考えてあげますよ」

天田はそう言つて、首を捻つて斜め上を数秒間見つめた後に、突然バツと明るい顔をして、右手の拳で左の掌をポンと叩いて「ピコーン！」と珍妙な言動。右手が左手に仕事をした。

「ユートさんを持ってこいの、とつておきの仕事があります。場所もすぐ近くだから、移動を含めても、短時間で済みます」

「それは嬉しい。『女が喜ぶ』と書いて『嬉しい』と読ませる

のは何故だろうね？ まあ、いいや。で、何処なの？」

どうも僕は、話の腰をメキツと折りたくなくなるといふか、首をキユツと絞めたくなくなるといふか、つい余計な事を言う。

「えつと……G 大学駅から歩いて数分です。ここからだと同四駅ですか。ユートさんって、確か、今、大学のすぐそばに住んでるんですよ？」

上京してから五年と半年、僕は大学の正門近くのアパートにずっと下宿している。その間、うちに来た事のある人間はほんの数人。一人で過ごす時間を最も大切にしているからだ。まして天田は、遠慮せずに話しかけてきそうだから、絶対に呼ばないでおこうと密かに決めている。

「そうだね。正門から歩いて、まあ、五、六分かな。どんなにゆつくり歩いても十分以内に着く。走れば三分で済む。車なら一分、音速なら三秒、光速なら一瞬」

「……はあ」薄いリアクションの天田。

「もつとも、光速で移動する事は不可能」

「いや、音速も厳しいです」少しは暖かい反応。

「地球固定座標系で観測すればね」

「……話を戻しましょうよ」

人が話を戻そうとすると、余計に邪魔をしたくなる。エントロピー増大則のせいだろう。

「珠算も十級」

「そこじゃないです！」

3 視覚（シカク）

それから四日後の夕方。僕は電車に乗っていた。普段、通学の手段は徒歩。大学に行かない日は家から一步も出ずに、終日、本を読んで過ごす。電車に乗るのは実に久しぶりだ。

車内は空いていた。僕は、進行方向に対して右側の席に座った。窓外の風景が右から左へ滑らかに動いている。近くの物ほど速く、遠くの物ほど遅く。月は既に白く輝き、周囲の流れに逆らうように、濃紺の長方形の中心で静止している。

雲は、固体のように立体的。それでいて軽そうで、ハリボテか、或いはCGみたい。雲の左側はわずかに明るく照らされ、逆に右側は空よりも暗い。

電車は東に進んでいる。

月と雲の配置に、何やら怪しい魅力を感じた。その嘘臭い景色から、目が離せない。何故だろう。嘘臭いのに。それとも……嘘臭いから？ だとしたら何故だろう。僕が嘘ばかり吐いているから？ 僕が嘘を吐けない人間だから？ なんて冗談。どうでも良い。

電車が減速し始めた。幾本もの鉄柱が視界に現れ、右から左へ飛んでいく。やがて速度はゼロに収束し、電車は丁寧に停止する。

ホームに降り立つと、すぐ目の前の柱の上に、周囲の何よりも黒い影があった。一羽のカラス。

その背景には月と雲。一つの作品のように完成した、視覚情報^①の集合。写真やキャンバスに収めたくても、カメラも絵筆も、今はもう無い。この明度と彩度の低い背景は、モニタで再現するなら「#000033」、印刷なら「C90 M80 Y30 K70」といった所だろうか。カラスだけ特殊印刷で差別化したら面白いかもしれない。

カラスが飛び立った。

腕時計を見る。約束の時間まで、随分と余裕がある。天田にしつつこく注意されたからだ。遅刻は厳禁。僕は勿論の事、紹介してくれた天田の信用にも関わる。

改札を抜け、依頼人との待ち合わせ場所に向かった。

4 依頼（ヘイライ）

依頼人との初対面は、彼女の自宅で行われた。

高級住宅街の中でも際立つ豪華な門。チャイムを鳴らすと、

使用人と思われる、ダークスーツに身を包んだ初老の男性が現れた。十二畳くらいの小綺麗な洋室に案内された。部屋の中央には、木製のテーブルと椅子が二脚。その片方に座らされて待っていると、やがて彼女が部屋に入ってきた。

「はじめまして、銀杏坂アヤミです」

深々とお辞儀をする彼女の姿に既視感を覚えた。だが、こんな豪邸に住んで人を雇うようなブルジョアと交流した事は無い。彼女が顔を上げる。

肌は、早朝の雪原のように白い。対照的に、肩まで伸ばした艶ある黒髪は、さつき見たカラスの羽を連想させる。地球の重力に従って美しい直線を描いている。そして、唇は薄く、血のように赤い。否、血で赤いのだ。毛細血管の赤。

白、黒、赤。身の回りの多くの物に使われている、効果的な配色。僕はスイス鉄道の時計を思い浮かべた。

「はじめまして、天田から紹介に預かりました……」慣れない敬語を慎重に使用する。「堀石ユートと申します。天田とは、大学で同じ研究室に所属しています」

僕は、軽く会釈をした。首から上を前方に十五度ほど素早く倒してすぐ起こす、そんな奇妙な格好になった。我ながら、動きが硬い。予想以上に緊張している事に気付いた。

「あの……初日から遅刻して、すみません」

今度は三十度ほど上体を傾けた。角度に比例して、二倍丁寧と言えよう。実際に反省していた。

「言い訳は趣味ではないけれど、理由を知ってもらえば、二度目以降、もう遅刻しないと信じてもらえと思うから、一応、説明します。実は、重度の迷子になっていて……」

再び頭を下げた。

「あ、いえ、気にしていませんから」彼女は上品に微笑んだ。天田の笑い方とは正反対だ。

ひよっとしたら、『迷子』という響きが可笑しかったのかもしれない。『道に迷った』で良かったのに。しかも『重度の』って……。

「この辺りは道が入り組んでいますものね」フォローまでしてくれた。

どうやら怒ってはいないようだ。それならば、これ以上かしまっている、萎縮させてしまいかもしれない。もう少しフレンドリーな会話を試みる。

「そうかな？ 僕の空間把握能力が低過ぎるのが原因だと思っただけだ」意図的にタメ口にした。

更に、この話題からナチュラルに自己紹介に移ろうと思いついた。天田が言うには、最初の業務は自己紹介だそうだった。

「その原因は故郷にある。僕は、新潟（しんじょう）の新城市という所の出身

でね。まあ、市とはいっても、越後平野のど真ん中に、時間的にも空間的にも不連続に出現した街って感じで、境界を越えるとブツリと家が無くなって、山か地平線まで田んぼさ」

その様子をジェスチャーで表現しながら喋る。無意味だとは思ったが、相手にとって分かりやすく話そうとするサービス精神が大事なんです、と天田が言っていたのを思い出す。

「鉄道が正確に東西に横断して、道路も碁盤の目状に交差している、幾何学的な街なんだ。故に、道に迷わない」

「素敵、京都みたいですね」彼女は声を弾ませた。

おそらく『碁盤の目状の道路』というフレーズがヒットしたのだろうが、実際、京都とは似ても似つかない故郷を思い浮かべ、何故か恥ずかしくなる。

「あ、いや、街並みは全然違うんだよ？」頭をかきながら小声になる。「それに、僕は京都ですら迷子になったし」余計な事まで口にする。

そして、しばしの沈黙。

「あ、えっと、因みに僕はこの仕事は初めて……というか、アルバイト自体、実は初めてなんだ。でも、わりと自信はあるから、安心して」

「はい」本当に安心したのか、それとも社交辞令なのか分からないが、彼女は笑った。

しかし、再び沈黙。もつと積極的に喋り続けないと、すぐに静寂に支配されるようだ。

「では、故郷を紹介したついでに、僕の方から、もつと細かく自己紹介をしよう。で、その後は君の番」

「すみません、先生、その前に」

「え？ はい、何？」僕は動揺した。

医者でも政治家でも教師でも作家でもない平凡な大学院生が、人から『先生』と呼ばれる事など、まず無い。塾の講師か、或いは、家庭教師のアルバイトでもない限りは。

「先生は、コーヒーと紅茶と、どちらがお好きですか？」

「お構い無く」天田から教わった台詞を口にする。本当はコーヒーが飲みたいのに。

「何か、飲まれませんか？」

「……じゃあ、コーヒーを」

5 弄い(ヘイライ)

その日の夜、夢を見た。世界は白と黒の二色で構成されていた。正確にはグレースケールだった。そもそも夢は白黒だと主張する人間もいるが、その真偽はどうでも良い。夢の中で、僕は夢だと気付いていなかった。

「あれ、何故、白黒なんだ？」

院室のブラインド越しに見える空は50%程度のグレー、隣の建物の壁はほぼ完全な白、アスファルトの地面は逆に黒、その上に20%グレーの銀杏の葉が散らかっていた。白黒の世界を目にして、僕は首を捻った。

振り返ると、母がいた。そこは実家のダイニング。突然の場面転換。正面に母が座っていた。母も白黒だった。テーブルも椅子も白黒だった。壁も床も天井も白黒だった。

「お母さん、どうして、全部、白黒なの？」

そう尋ねた僕は、小学生くらいの子供になっていた。母は、微笑みただけで、何も答えなかった。それなのに、僕は「ふうん、そっか」と納得した。

外に出ると、道行く人、皆が白黒だった。空も白黒だった。

山も白黒だった。田んぼも白黒だった。犬も白黒だった。僕は犬が怖いので、「ウヌヌウン」と念じて空を飛んだ。すると、遠くに学校が見えた。僕の通っていた小学校だ。でも、教室のドアを開けて中に入ると、小学校の時の友達に混ざって、中学や高校の時のクラスメイトもいた。僕の席には、何故か天田が座っていた。「おい、天田。そこは僕の席なんだから、どきなよ」と言うと、天田は僕に手紙を渡した。手紙には、『放課後、屋上で待っています』と書かれていた。天田の字ではない。

チャイムが鳴って、前方のドアから、大仏をインテリにした感じの男が現れた。小学校六年生の時の担任、ミヤジだ。一時限目は数学で、内容は線形微分方程式だった。誰を対象としているのか、とにかく簡単過ぎて退屈で、僕は教室を出て屋上に向かった。階段を上っていると、タイミング良くチャイムが鳴って、放課後になった。

屋上のドアを押し開けて外に出た。風が強かった。屋上から見渡せる風景も白黒だった。ただ一点を除いて。屋上にいた少女の唇だけ赤かった。

僕は、そこで夢から覚めた。ひどく興奮していた。呼吸が荒かった。涙も流していた。まだ暗かったので、寝直そうとした。なかなか寝付けなかったが、次に目を開けると朝になっていた。もう夢は見なかったようだ。

6 嗜好〈シコウ〉

「やあやあ、ユートちゃん！」

数時間後、院生室のソファに寝転がって『走れメロス』を読みながらパンをかじっていると、白衣姿の水野さんが部屋に入ってきた。

水野ホノカさん。研究室唯一のドクダで、僕にとって唯一の

上級生。また、天田にとってはテニスサークルの先輩でもあり、天田を『しげち』と呼び始めたのも彼女だぞうだ。そして、僕の事は、ちゃん付けて呼ぶ。

「今、食べ始めた所？ 実に丁度いいね。そんな一人で寂しく食べてないで、一緒に食べようよ！」

見ると、水野さんは手にコンビニのビニル袋を提げている。

僕は本を読んでいたかったので、「寂しくありません」と反論したが聞き流された。すぐに諦めて、起き上がってソファを半分譲った。水野さんは、ビニル袋からプリンとスプーンを取り出して、テーブルの上に置いた。

「またプリンですか？」

「オフコース！」

水野さんがプリン以外の固体を食べる姿は、半年前、天田の代が研究室に所属した時の歓迎バーベキューパーティ以来見ていない。

水野さんはかなり痩せている。白衣の袖から細い腕が覗く。

首も、脚も細い。それなのに、大き目の白衣を着ているものだから、余計に細く見える。その時初めて、水野さんが白衣の下に着ているトレーナーの絵柄がプリンである事に気付いた。そのプリンのイラストの上には『I LOVE』の文字列が弧を描いている。極めて明快な嗜好の主張。

「ユートちゃんって、今、研究、何してるの？」

「今週から、あけぼののデータを解析しています」

「ふうん、そっか。そっちの事は、よく分からないや！」

あけぼのとは、オーロラ観測衛星の名称。僕は、その衛星で観測した粒子フラックスデータを解析している。同じ研究室でも、人によっては全然違う事をしている。僕や天田がコンピュータに嘔り付きなのに対して、水野さんは白衣を着て実験室にこもる。

「時に、ユートちゃん。しげちーから聞いたんだけど、バイトを始めたんだって？」

実物の方のプリンを胃に収めた水野さんは、突然質問した。

僕は、咀嚼中のメロンパンを飲み込んでから返答した。

「ええ、天田に紹介してもらって、昨日が初日でした」

そう言えば、天田はまだ学校に来ていないようだ。昨日の報告をしようと思っていたのに。

「ほっほーう、で、どうだったの、件の美少女は？」

「はい？」僕は耳を疑った。

「あの、天田から、一体、どう聞いているんですか？」

「可愛い女子高生と楽しくお茶して談話してお金がもらえる、天国のようなアルバイトって聞いたよ」

「な！」目を見開いた。

「違うの？」逆に目を細める水野さん。眼球の露出面積の和を、僕と保存しようとしているのだろうか。

「少なくとも、そんな、楽しく談話してるつもりは……」

「じゃあ訊けど、昨日は何処で何したの？」顔を寄せる水野さん。警察の取調べのようなプレッシャー。

「いや……まあ普通に、コーヒーを飲みながら互いに自己紹介して、あとは、彼女が何処の大学に行きたいかとか、将来何になりたいかとか、そんな話を聞いて……」

「それって談話でしょ！」やはり突っ込まれた。

「すみません」何故か謝る僕。非は無いと思うのだが。

「いいな、いいな。私も、女子高生とお茶するだけでお金をもらいたいもんだな！ ユートちゃん、私と代わってよう！」無茶を言う水野さん。

「無理です」

「二生のお願ひ！ 代わって、代わってえ！」いい歳して駄々を捏ねる水野さん。月に一度は一生のお願ひをする人だ。

「いや、待って下さい。昨日は単なる初顔合わせでして、本格的な仕事はこれからです。そんな、適当に喋ってるだけでお金がもらえるほど、世の中甘くは……」

「そうだ！ 結局、何のバイトなの？ 私、しげちーからは、可愛い女子高生とお茶して談話してお金がもらえる天国のよう

なアルバイト、としか聞いてないよ！」

「……」何か、天田に恨まれる事をしただろうか。

「女子高生が相手って事は、家庭教師かな？」

「確かに今回は女子高校生相手ですが、大学生や、年配の人から依頼される事もあるそうです。依頼人が自分ではどうにもならない問題を、代わりに処理してあげたり、部分的に手伝ってあげたり、こんな風にしたらどうでしょうか、方法を提案したり、要は、人助けです」

「何だか、探偵か請負人みたいだね。カッチョイー！」小さく拍手する水野さん。

「いえ、そんな事ありませんよ」

「いやいや、すごいって！ で、で、今回の依頼はどんなものかな？」僕にマイクを向けるポーズの水野さん。

「あの、僕はよく分かりませんが、守秘義務って概念があるのではないのでしょうか？」

「あ、確かにそうだね！」

結局その日、天田は大学に姿を現さなかった。

7 思考（シコウ）

いつもの事だが、その日も、床に就いてからしばらく頭だけ

働かせていた。

自分の人生が、生まれてから今まで、連続した一つのものであると、僕は実感出来ない。

保育園に通っていた僕。小学生だった僕。中学生だった僕。

高校生だった僕。そして、大学に入ってから僕。それらが同一人物であると、当然理解出来るし、疑う方がどうかしている類の事象であるが、どうしても実感だけは出来ない。

不連続な人生。不一致する自己。それは、ここ一年以内に発現した、比較的新しい感覚。

例えば、ごく稀に、高校の同級生などから連絡を受ける事がある。結婚式の誘いだったり、同級会の誘いだったり、単に懐かしくなつて電話をしてきたり。連絡をくれたその旧友の記憶はある。声を聴けば、彼らの名前や顔、キャラクタ、共に体験したイベント、その時自分はどうか感じたか、などを思い出す事は可能。しかし、リアリティが無い。

それなのに、彼らは口を揃えて言う。お前も変わらないな、と。何故だろう。僕ほど変化した人間を、僕は知らない。昔の自分を思い浮かべ、今の自分と比較する。その関係を表す最適な言葉、それは『他人』。昔の自分など、他人。

例えば、かつて僕は、友人と自転車で北海道に行った。息を切らして、幾つもの山を越えた。狭いトンネルの中でトラック

の横を走って、死ぬような思いをした。雨の日、カップの内側は着ている意味があるのか怪しいくらいに汗でびしょ濡れだった。当時、それらは一生忘れられない思い出になると信じた。ところが今やそれらは、本当に自分の体験なのか疑いたくなるほどに風化した。

例えば、かつて僕は、自分以外の一個人に対して、この人のためなら他の全てを捨てても良いと思つた。信仰にも似た強毅（キョウイ）親交とはほど遠い狂気。正確には、この人のために全てを捨てたい、という自己満足（マズクハクマンゾク）。だが、その願望は錯覚だった。否、本当は当時から気付いていたのかもしれない。捨てるための言い訳が欲しかっただけ、という仮説はどうだろう。絶対的な存在ではない。偶々目に留まつて選ばれた、痛みを和らげるための装置。悪くはないが、考えうる解の一つに過ぎない。最早、正解など分らない。

あれこれ考えても仕方無い。僕は目を瞑つた。

明日、目が覚めたら、勿論大学に行く。大学に行つて研究して、昼食を摂りながら本読んで、研究して、夕食を摂りながら本読んで、研究して、帰宅してシャワー浴びて就寝。その繰り返し。卒業したら就職して、通勤して仕事して帰宅して本読んで寝て、その繰り返し。出世して退職して、歳とつて、やがて死ぬ。ただ、それだけ。もしかしたら読書にも飽きるかもしれない。

ないし、テレビを見るようになったり、歳をとつたらゲートボールや盆栽を始めたりするかもしれない。過去の僕が他人なら、未来の僕も他人。勝手にやってくれ。

電磁波のようにシンプルに、その時その時、最適な解をパチッと選んで、ウダウダ悩まずに……何だっけ？ そう、電磁波のように、シンプルに……。

あれ、電磁波つてシンプルか……？

8 死期（シゴ）

翌々日の昼時、院生室のソファに座つて『斜陽』を読みながらカップラーメンをすすつっていると、水野さんが部屋に入つてきた。

「やあやあ、ユートちゃん！」

「……こんにちは、水野さん」僕は潔く本を閉じた。

「お、今度は『斜陽』？ 太宰治、好きなんだね！」

珍しく白衣は着ずに、緑のタートルネックセーターに、ダークグレーのロングスカートとを合わせている水野さん。手にはコンビニのビニル袋。

「ええ、まあ。昔、『人間失格』を読んで気に入りました」

しかし、当時受けた衝撃も、既に過去の記憶。

「ほっほーう」水野さんは大きく頷いた。

「ユートちゃん。それ、さっさと食べ終わって。で、プリンあげるからさ！」ビニル袋を持ち上げる水野さん。「ちよっと、ついてきて！」

「要りません」と反論したが、勿論、聞き流された。水野さんに逆らっても仕方が無い。研究室で『水野さんに腕押し』『水野さんに釘』という諺が生まれるほど。降参して急いでラーメンを片付けると、水野さんに服の袖を掴まれて、屋上まで連れて行かれた。

人の姿は無い。気温は低い、日差しが暖かい。僕と水野さんは、柵のそばのベンチに座ってプリンを食べ始めた。

「時にユートちゃん、研究室の中でも、私とユートちゃんとしげちーって特に仲良いよね？」

「否定はしません。まあ、悪くない仮説だと思います」

僕は欠伸をした。食事の後は眠い。

「時にユートちゃん、黒のアントは？」

「白です」一瞬、意味が分からなかったが、すぐに答えた。

黒と白？ 先日見た、白黒の夢を回想する。場所も屋上。

「じゃあ、白のアントは？」次の質問をする水野さん。

これは、対義語アンチニムの当てっこ。『人間失格』の『葉蔵』が友人と興じた遊び。解は曖昧で一意に定まらず、友人との議論自体

を楽しんでいるように思えた。

「確か、作中では『黒のアントは、白。けれども、白のアントは赤。赤のアントは黒』とありました」

そう言いながらも、頭では別の事を考えていた。白黒の夢。屋上の少女。あれは一体……。水野さんではない。銀杏坂アヤミでもない。では、誰なのか。思い出したくない、と思っただけ。つまり、既に思い出していた。微弱電流が走るような頭痛を覚えた。

反射的に思考を切り替える。アント、アント、アント。水野さんの意図が掴めないが「ですが、やはり白のアントは黒でしょう」と素直に答えた。

「じゃあ、赤のアントは？」予想通りの質問。

「シアン」即答した。

「ユートちゃんらしい答えだね！」

僕はプリンを平らげた。甘過ぎて少し気持ちが悪かった。おまけにタバコの匂いが微かにして、痛みが増した。立ち上がって見下ろすと、下の階のベランダで学生が数人タバコを吸っていた。煙から逃げるように、柵から少し離れた。

「時にユートちゃん」急に真剣な声色になる水野さん。「冷酷非情なユートちゃんに訊くだけ無駄かもしれないけど！」

「……何ですか？」

「ここ数日、何でしげちーが大学に来てないか、知ってる？」

「いいえ」水野さんに背を向けたまま答えた。

「実はね、私も、ついさっき知ったばっかなんだけど、しげちー、インフルエンザにかかって入院してるんだって！」

「そうですか」興味が無かった。親しい人間が病気になったと聞いても、特に何も感じない。僕は同情が出来ない。

「今日、ゼミが終わったら、お見舞いに行つてあげようよ！」

「今日はバイトがあるので無理です」

「しげちーとバイト、どっちが大事なの？」

「……」最低な台詞が浮かんだが、自粛した。自分が苛立つているのが分かった。

「そもそも、しげちーに紹介してもらったバイトでしょ？」

「関係ありません」

「ユートちゃん、本当に冷たい！ 心配じゃないの？ インフルエンザで死ぬ人だっているんだよ！」

振り向いて答えた。「人はいざれ死にます」止められなかった。「それにウイルスによる淘汰は、極めて健全な死に方だと思えます」

「馬鹿ユート！ 死んじやええ！」水野さんは震えている。

「ええ、僕も、水野さんいざれ」冷たい声。

しばらく頭痛は治まらなかった。

9 私語〈シゴク〉

「後悔していますか？」

数時間後、僕は銀杏坂アヤミと向かい合っていた。テーブルの上にはコーヒーとショートケーキが並んでいる。

「そうだね。最低だ、水野さんに八つ当たりするなんて。明日会ったら謝りたい」と答えた。一瞬の空白を挟んで「すごい。

今のは、自分でも驚くほど正直だった」と付け加えた。

「先生は、正直な人ですよ」彼女は言った。

的外れな発言だと思ったが、腹は立たなかった。「そんな事無いよ」首を振る。「嘘ばかり吐いてる」

「本当ですか？」

「その質問に意味はある？」

しばしの沈黙の後に、彼女は笑った。賢いし、優しい。

「まあ、それでも僕はお金を頂く立場だから、正直に答えるよ。正確には、嘘を吐かず人に騙しているのかな」

「それは、ミステリにおけるミスリーディングのような技術ですか？」

「ごめん、そちらには明るくない」

僕は乱読主義で、ミステリを読む事もあるが、積極的に選択

するわけではない。

「例えば、君が僕に『答えはAですか?』と訊いたとしよう」

「A?」

「いや、何だっつていいんだ。アポカドでも、あけぼのでも」

彼女が吹き出す。僕も釣られて笑いそうになったが、全力でこらえた。

「そこで僕が驚いた顔をして『え? 君、本気でAだと考えているの?』と切り替えしたら、答えはAじゃないと思うよね?」

「そうですね」

「既に僕がAだと仄めかしていた場合は、『Aだとは言っていない』と突っぱねるのも効果的かな。或いは『Bの方が妥当だ』とは思わないの?」と訊いても良い」

「確かに、Aを否定してはいませんね。ところで、Bは何ですか?」期待のこもった声。

冒険して「プタゴリラ」と答えが受けなかった。後悔。

「なるほど、分かりました。それでも先生は、何というか、素直な嘔吐きさんです」

「嘘が下手って事?」

「あ、いえ、そういうニュアンスで言ったのではありません」嘘が下手だと思っっているかどうかは否定されなかった。さっ

そく僕のやり方を真似してみたのかもしれない。

「そうかな。そういう事って、声で分かるもの?」

「ええ、耳は良いんです、視力に障害がある分」彼女は目を閉じたまま笑った。微塵も自嘲的でない、水飴のように甘い笑顔。

「そう。別に求めていないとは思うけど、僕は、君の目の事も、心臓の病気の事も、全く同情出来ないからね」

彼女は、十四の頃から視力が落ち始め、今ではほとんど見えないようだ。おまけに心臓も生まれ付き弱いらしい。

「ええ、その方が…むしろ、先生がそういう方だからこそ、天田さんは先生を紹介してくれたんだと思います」

「ふうん」さっぱり理解出来なかった。

コーヒを飲み干す。普段飲んでる物とは比較にならない、まろやかな味わい。さぞかし高価な豆を使っているのだろう。

「そろそろ勉強を始めようか? 一応、僕は家庭教師として雇われているのだから」

「もう少しだけ、お話をしましょう」

「構わないよ、僕は。この二時間をどう使うかは、君の自由。雑談だろうと、勉強だろうと、何にでも付き合おうし、帰れと言われたら帰る」

それは初めから決めていた、家庭教師を務める上での僕なりのポリシー。否、そんな大層なものじゃない。単なるルール。

「では、幾つか質問をしたいと思いますので、正直に答えて頂きますか？」

「いいよ」

少しだけ緊張した。銀杏坂アヤミ。標準から有意にずれた、つまり少し変わった娘だと思う。そういう年頃なのか、お嬢様だからか、障害のせいかな。考えても分からないし、そこまで興味のある問題ではない。

「ただし、正直の定義は嘘を吐かない事でいいかな？」

「はい」

正直に答えると決めた。答えにくい質問も出るかもしれない。だが、いちいち悩むくらいなら、いつその事、全て正直に答えるルールを決めた方が楽。僕は、僕以上に面倒臭がり屋な人間を知らない。僕をマメだと評価する人間の気が知れない。

「どうして先生はその、水野さんという方と喧嘩をされたのですか？」

「喧嘩をしたつもりは無いよ」争わない方が楽だから。

「質問を変えます。先生はその時、どうして、ご機嫌がよろしくなかったのですか？」

「帰りたくなった。」

「はあ、そう来るか。悪いけど、その前に、コーヒーのお代わりをお願い出来ないかな？」

10 不終〈オワラズ〉

しばらくして運ばれてきた二杯目のコーヒーを一口飲んで、僕は驚いた。

「すごい。苦くなつてないし、風味も全然落ちてない」

「毎日、三時間かけて水で抽出して、飲む直前に、飲む分だけ温めています」

「なるほど」納得した。

ケーキには手を付けていない。ここまでコーヒーが美味しいと、他の物を口にするのが妙に勿体無い。

「では、よろしいですか？」

「うん」よろしくないが、そう答えた。生徒とのコミュニケーションも仕事の内だから。それに、ルールには従う。

「では、先ほどの質問にお答え頂きますか？」

「了解」

思わず溜息が出た。

「水野さんと屋上で話している時に、全くの偶然なんだけど、あまり思い出したくない人の事を思い出したんだ。君とその人の外見が少し似ている事や、変な夢を見た事とか、まあ原因は色々あって。あと、体調も良くなって……」

「それは誰ですか？」

「君の知らない人。本名は訊かないで」

時計を見る。授業開始から、まだ二十分。否、授業など、まだした事が無い。

「昔、先生がお付き合っていた方とか？」

「な！」動揺した。コーヒを口に含んでいたら、マンガみたいに吹き出していただろう。「……それは少し突飛な発想じゃない？」

「差し支え無いようでしたら、イエス・ノーでお答え下さい」

誤魔化せなかった。思ったより手強い。

「分からない」再び溜息を吐く。「その境界が曖昧なケースも、往々にしてあるよね？」

「今でも、その人の事が好きですか？」次の質問をされる。

何故、そんな質問をするのだろう。まるで拷問だ、と思った。

時給三千円の拷問。やれやれだ。

「その前に、一つだけ訊きたい」

「何でしょうか？」

とりあえず、彼女のペースから逃れようと試みる。

「人を騙す事の最たるデメリットって何だと思う？」

「まず考え付くのが『人から信用されなくなる事』ですが、加えて『人を信用出来なくなる事』の方が重大だと思います。違

いますか？」

彼女は少しも悩まずに、スラスラと淀み無く答え、僕を感心させた。だが、インシアティブは取り返せそうだった。

「別に正解なんて無いけど、僕はこう考える。『自分を信用出来なくなる事』だと」

咳払いをしてから、僕は一気にまくし立てた。

「本気で人を騙す人間は、自分も騙すんだ。そいつは自分の心を騙す。感情を偽る。願望を無視する。本音を捻じ曲げる。すると自分の本心が分からなくなる。何がしたいのが見えなくなる。だからそいつは、ルールに依存する。理論にしがみつ

く。論理にすがる。仮定に固執する。定義に拘る。しかし、論理の通用しない分野、理論の整備されていない領域、少なくともそいつが知らない、或いは詳しくないだけかもしれないが、そんなフィールドも存在する。するとそいつは困惑して、誤魔化すしか手段が無くなる。自分を含め、人と向き合おうとはせずに全てを誤魔化している内に、益々、自分の感情が分からなくなる。例えばそいつが『Aだ』と言う。現象としては、そいつの口から『Aだ』という音が鳴った。次の瞬間、そいつは首を捻る。そうなのか。自分は本当にAだと思っているのか。単に、反射的に答えただけではないか。妥当そうな事を適当に言っただけではないか。最初に頭に浮かんだからと言って、それが本

心とは限らない。分からない、分からない、さっぱり分からない。やがてそいつは諦める。日常を構成するほとんどの行為が、人生を構築するほとんどのイベントが、自分には向いていない。明確な解が存在する分野でのみ自分は生きよう、と決心する」

彼女はずっと黙って聞いていてくれた。

「それは……先生の事ですか？」

僕は、用意していた台詞を読んだ。

「え？ 君、本気で僕の事だと考えているの？」

銀杏坂アヤミは、何も言わなかった。

敬意を込めて、僕は彼女を見つめた。白い肌と、黒い髪と、赤い唇を。この強烈な白黒赤のコントラストを、ずっと忘れな
いでいたい。目に焼き付けて、なるべく長い間、覚えていたい。
カラスと血と雪のような、少女の儂い命を。

〈了〉